

国立国語研究所学術情報リポジトリ

<全文>Evidence-based Linguistics Workshop 2025 発表論文集

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-10-10 キーワード (Ja): Evidence-based Linguistics キーワード (En): Evidence-based Linguistics 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000571

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution 4.0 International License.



Evidence-based Linguistics Workshop 2025

発表論文集

2025 年 9 月 15 日 (月・祝)-16 日 (火)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所 編

目次

● 「日本語教科書における文化的要素の提示について — 『まるごと』と『みんなの日本語』を例に—」	
張 宇欣（天津外国語大学: 学生）	1
● 「属性叙述述語としての「x ならでは（の N）」」	
坂本 瑞生（東北大学: 学生）	9
● 「比喻のフレーミング機能の実証的な対照研究：日本と英国における Amazon レビューのレトリック」	
小松原 哲太（神戸大学）	24
● 「サハリンと北海道のアイヌ語地名に残る「川」の古形」	
落合 いずみ（帯広畜産大学）	34
● 「名古屋・関西・佐賀方言における埋め込み疑問文の解釈と音調体系」	
田中 真一（神戸大学）・松井理直（大阪保健医療大学）	46
● 編集後記	
浅原正幸（国立国語研究所）	57

日本語教科書における文化的要素の提示について

張 宇欣（天津外国語大学）[†]

The Representation of Cultural Elements in Japanese Language Textbooks

Yvxin ZHANG (University of Tianjin Foreign Studies)

要旨

経済のグローバル化が進む中で、中日両国の文化交流も活発化している。異なる文化的背景をもつ人々との交流において、言語だけでなく文化的要素の重要性を認識する人が増えている。これに伴い、日本語教育も言語能力の育成から、日本語を用いた異文化間コミュニケーション能力の育成へと転換する必要がある。教材は言語学習において重要な役割を果たし、学習者に大きな影響を与えるため、本研究では、張虹らの「分析枠組み」を参考し、『まるごと』と『みんなの日本語』に含まれる文化的要素をコーディングし、量的に統計を行ったうえで、文化内容を比較、分析する。それにより、日本の教材における文化提示の特徴を明らかにし、日本語教材への示唆を得ることを目的とする。

1. はじめに

経済のグローバル化に伴い中日間の文化交流が活発化し、日本語学習者も増加している。言語と文化は密接不可分であり、H.H. Stern (1999) は「文化を伴わない言語教育は不可能」と述べる。中国の『大学日本語専攻基礎段階教育大綱』（2001）でも「社会文化理解能力の養成」が目標として掲げられ、日本語教育における文化理解の重要性は広く認識されている。教材は教育実践の中核であると同時に文化的産物でもあり (Gray, 2013 ;Graves, 2019)、そこに含まれる文化要素の分析は重要な研究課題である。

本研究は、日本で出版された日本語教科書の文化提示を比較・分析し、中国国内教材に偏った既存研究を補うことで、外国語教材における文化提示の理論的枠組みの発展に寄与することを目的とする。また、異文化理解能力育成に資する教材選定や開発への実践的示唆を提示し、文化提示内容の差異を明らかにすることで、教科書の改善と異文化コミュニケーション能力の向上に貢献することを目指す。

2. 先行研究

[†]riyuyanzhao@tjfsu.edu.cn

多文化環境において質の高い日本語教育を進めるためには、言語教育と文化探究を融合させ、学習を具体的な言語・文化環境の中に位置づけることが不可欠である。こうした視点から、これまで多くの研究が日本語教育と文化の関わりを論じてきた。大きく分けると、日本語教育への文化導入、日本語教育と文化自信・自覚、日本語教育と異文化コミュニケーションの三分野がある。本研究が焦点を当てるのは、その中でも特に教材における文化提示の問題である。

教材における文化提示の研究は、海外では 1960 年代に始まり（張虹、李曉楠 2022）、近年再び注目を集めている。中国では過去 20 年間で着実に発展し、とくに 2020 年以降、学術的関心が急速に高まっている（劉揚 2024）。日本語教材について、日本国内の研究は教材開発が中心であり、例えば島田・古川・久保田（2004）、堀田・菅谷（2017）、高井（2013）、仁科・武田（1992）、大船（2017）などがある。一方、中国では大学・高校・中学の各段階を対象に、文化要素や提示方法を分析する研究が多く見られる。基礎日本語教材の文化的特徴を探る李曉霞（2023）、徐安琪（2023）、周寧（2021）や、高校教科書を分析した朱桂榮（2022）などがその例である。また、趙徳旺・朱彤（2023）は中国出版の二種の基礎教材を比較し、異文化コミュニケーションや思想政治教育の側面に着目している。

他の外国語教材に目を向けると、英語教材の研究が圧倒的に多い。張虹ら（2022a）は英語教材研究における二つの課題、すなわち文化提示の分析枠組みの欠如と、提示内容に偏って提示方法が軽視されてきた点を指摘し、新たな分析枠組みを提案した。この枠組みはフランス語（談佳 2022）、ドイツ語（葛囡囡 2022）、イタリア語（高如 2024）などにも応用されつつあるが、他言語の研究は依然として限定的である。

これらの先行研究から、日本語教育における文化提示の重要性は広く認識され、文化構造や提示方法をめぐる定性・定量的な分析が進んでいることが分かる。しかし、日本語教材の研究は中国出版の教材に集中しており、日本出版の教材に関する文化提示研究はきわめて少ない。本研究は日本で出版された日本語教材を対象に、文化提示の内容を検討し、その特性を明らかにする。

3. 文化と文化的要素の定義

文化という概念はきわめて多岐にわたり、一言で定義することは難しい。胡適は文化を「民族生活の様式」とし、梁漱溟も同様に、精神生活・社会生活・物質生活の三領域に及ぶ生活様式であると述べている（郭湛 2005）。エドワード・タイラー（1871）は『文化的起源』で、文化・文明を「知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習、その他人間が社会の一員として獲得した能力や習慣を含む複雑な全体」とした（陸揚 2006:153）。『三省堂国語辞典』（2022）や日本文化庁も、文化を時代・地域・集団ごとに異なる精神的・社会的営みや生活様式の総体として広く捉えている。

異文化コミュニケーション研究には四つの主要アプローチがあり、その一つである文化要素構成的アプローチは、文化を社会で共有される複数の要素の集合として捉え、体系的かつ定量的に提示可能とする。Zhu Hua（2014, 2018）はその典型要素に信念、価値観、規範、風習、伝統、儀式、歴史、人工物を挙げる。Moran（2001）は言語教育の実践から、産物・実践・観念・コミュニティ・個人の五要素モデルを提示する。胡文仲（2019）は民族の歴史や価値観、社会制度など八つの要素を指摘している。本研究はこれらの議論を踏まえ、

文化要素構成的アプローチを採用する。

4. 研究デザイン

4.1. 研究対象

本研究は日本で出版された『みんなの日本語』（以下は『みんな』と略称）と『まるごと日本の言葉と文化』（以下は『まるごと』と略称）の初級教材を研究対象とする。両教材は国内外の日本語教育機関で広く行われている。

教材	出版時間	課数	ページ数
『みんな』 初級 1	2016	25	249
『みんな』 初級 2	2016	25	247
『まるごと 理解』 初級 1	2014	18	202
『まるごと 活動』 初級 1	2014	18	182
『まるごと 理解』 初級 2	2019	18	199
『まるごと 活動』 初級 2	2019	18	184

表 1 教材情報

4.2. 研究課題

課題 1: 両教材の文化要素は地域上の特徴がどうなっているか。

課題 2: 両教材の文化要素は形式上の特徴がどうなっているか。

4.3. 分析の枠組み

本論文は文化要素構成的アプローチを採用し、張虹、李曉楠（2022）が提出された分析枠組みを参考し、以下のような分析枠組みを利用する。

地域	日本	日本以外のアジア	アジア以外の地域		
形式	文化産物	文化コミュニティ	文化観念	文化人物	文化実践

表 2 文化の提示内容の分析枠組み

張虹らの分析枠組みでは地域上には母語文化、目標国の文化、ほかの国家の文化と国際文化である。本研究の研究対象が外国人向けの日本語教材なので、学習者の母語文化が把握しにくい。また、教材の編成理念によると日本語、日本文化の紹介が中心となる傾向が強い一方、学習者に多様な文化を理解させる取り組みも重視されつつある。そのため、地域上には日本、日本以外のアジア地域（中国、韓国、タイ、マレーシアなど）、アジア以外の地域（アメリカ、ブラジル、オーストラリア、イギリス、ロシアなど）に分けられる。形式上には張虹らの分析枠組みのそのままに参考し、文化産物（例えば：日本のアニメ、漫画；中国の万里の長城、日本の金閣寺；日本のてんぷら、お寿司など）、文化コミュニティ（例えば：中国人、日本人；英語、タイ語；イギリス、アメリカなど）、文化観念（例えば：朱に交われば赤くなるということわざ、エコ理念など）、文化人物（例えば豊臣秀吉、夏

目漱石、バッハ、モネなど）、文化実践（例えば、祇園祭り、お花見など）に分けられる。

4.4. 研究方法

本論文は、4.3において示した分析枠組みに基づき、『まるごと』および『みんな』という日本語教材を対象に、それぞれに含まれる文化要素をコーディングする作業を行う。日本語教科書における文化要素は単語、文、文章、などさまざまな形式で現れる。本研究は「単語」を最小単位として統計する。例えば、「まるごと」初級1理解の第9課の練習部分において「中国語は文字をかくのがむずかしいです。」という文がある。この文から「中国語」という文化要素を取り出して「中国語—日本以外のアジア地域—文化グループ」という形式で記入する。また、「みんな」初級1の第12課の会話では「祇園祭はどうでしたか」というテーマにして対話の形式で日本の祇園祭を紹介する。この会話文から「祇園祭り」という文化要素を取り出して「祇園祭り—日本—文化実践」という形式で記入する。

コーディングの結果に基づいて、各教材における文化要素の種類などを数量的に集計し、文化要素に関するデータに対して χ^2 検定などの統計的手法を用いて分析を行い、そこから見えてくる文化提示の傾向や特徴について詳細に考察を加える。また、両教材間に見られる文化提示の差異の要因や背景にある意図などについても検討する。

5. 研究結果

5.1. 地域上の特徴



図1 『みんな』における地域上の文化要素

図2 『まるごと』における地域上の文化要素

図1と図2が示すように、『みんな』初級教材に含まれる文化要素は合計1127件で、そのうち日本に関するものが789件と全体の約7割を占め、他地域の文化要素を大きく上回っている。日本以外のアジア地域は151件（約13%）、アジア以外の地域は187件（約17%）であり、両者を合わせても約3割にとどまる。図2の『まるごと』では、文化要素の総数は1504件で、そのうち日本に関するものが1020件（約68%）、日本以外のアジア地域は220件（約15%）、アジア以外の地域は264件（約17%）と、『みんな』と類似した傾向が見られる。また、 χ^2 検定によると地域上で両教材の間は有意な差がなかった（ $\chi^2(2)=1.51, p > .05, ns.$ ）。この結果も両教材は地域上の分布がほぼ同じと証明できる。

この分布から、両教材とも日本文化の紹介に強く焦点を当てていることが明らかである。日本文化要素の多さは、『みんな』と『まるごと』が外国人学習者向けに日本語教育を行うという性格と密接に関連している。世界中の学習者の方たちに、日本語、日本文化、そして、その中で暮らしている人々を「まるごと」身近に感じるようにという理念に一致す

る。日本語の習得は単なる語彙や文法の理解にとどまらず、日本の生活様式や価値観、習慣を理解することで一層深まる。『みんな』の初級1の12課で京都の祇園祭のような伝統行事を取り上げ、学習者に日本固有の歴史的背景や地域文化の特色を伝えている。また、2セットの教材も天ぷらなど日本料理の紹介では、料理名を知るだけでなく、実際の飲食店での注文表現や会話場面の学習へとつながっている。さらに、東京、大阪、奈良といった都市を題材にすることで、日本の地理的知識や観光資源への理解を促している。

一方で、両教材は日本文化だけではなく、多様な文化への触れ合いも重視している。例えば、『みんな』の初級I第10課ではタイ料理の調味料「ナンプラー」を紹介し、学習者が異国の食文化にも関心を持てるよう配慮している。『まるごと 理解』初級I第10課ではスペインのダンス、フラメンコを取り上げる。学習者はフラメンコの背景にある歴史や地域性を知ること、単なる舞踊の紹介にとどまらず、スペイン文化に根差した価値観や生活様式を理解する機会を得られる。さらに、フランス映画やクラシック音楽、中国語、ブラジルの文化など、幅広い地域の文化要素が含まれる。これらは学習者に日本以外の世界を意識させ、国際的な視野の拡大を促す役割を果たしている。

5.2. 形式上の特徴

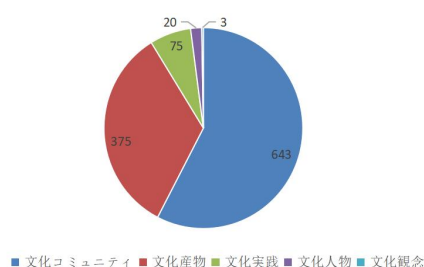


図3 『みんな』における形式上の文化要素

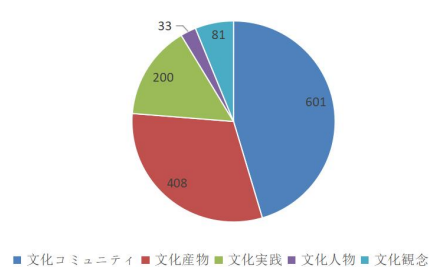


図4 『まるごと』における形式上の文化要素

図3と図4が示すように図3が示すように、『みんな』に含まれる文化コミュニティが643件（約58%）と半数以上を占め、文化産物が375件（約34%）で続く。文化人物は75件（約7%）、文化実践は20件（約2%）、文化観念はわずか3件（約0.3%）であり、抽象的、概念的な文化要素は極めて少ない。

図4の『まるごと』では文化コミュニティが601件（約46%）と最も多く、次いで文化産物が408件（約31%）、文化実践が200件（約15%）、文化人物が81件（約6%）、文化観念が33件（約2%）である。文化コミュニティと文化産物を合わせると全体の約4分の3を占め、学習者が具体的にイメージしやすい形態の文化要素が大きな比重を持っていることが分かる。

この分布から、両教材とも文化コミュニティと文化産物といった具体的で視覚化可能な文化要素を重視している。一方、文化観念や文化人物といった抽象度の高い要素は相対的に少ないことが明らかである。

そして、教材と文化形式の関連について χ^2 検定を行った。結果によると、文化形式は教材と有意な関連があることがわかった($\chi^2(4) = 118.76, p < .001$)。そこで、残差分析を行った。

	文化コミュニティ	文化産物	文化実践	文化人物	文化観念
『みんな』	6.0***	1.4	-6.5***	-1.2	-7.9***
『まるごと』	-6.0***	-1.4	6.5***	1.2	7.9***

表 3 文化形式について残差分析の結果

表 3 の結果から、文化産物と文化人物の残差の絶対値はいずれも 1.65 ($p<.10$) を下回っており、有意差がなかった。したがって、両教材における文化産物と文化人物の分布の差異は統計的に顕著ではないといえる。一方で、『みんな』では文化コミュニティの残差が 6.0 と有意に高く、この形式の文化要素が多く含まれていることが明らかとなった。これに対し、『まるごと』では文化実践 (6.5) および文化観念 (7.9) の残差が高く、行動様式や価値観など、生活や理念に関する文化要素が多く提示されていることが示された。

この結果は、『まるごと』は生活習慣や価値観など抽象的、背景的な文化理解も重視することがわかる。これは『まるごと』の多様な文化背景を持つ人々が日本語で交流する理念と一致する。特に『まるごと 理解』第 15 課、第 16 課および『まるごと 活動』第 15 課、第 16 課では、エコロジー観念に関するテーマを扱い、環境保護や持続可能な社会づくりといった現代的価値観を学習者に提示している。このような構成は、学習者が単に知識を得るだけでなく、グローバルな課題や多様な価値観に対する意識を高める契機となっている。

Moran (2004) は、文化を「文化コミュニティ」「文化産物」「文化実践」「文化人物」「文化観念」という五つのモデルに分類し、その中核に位置づけられるのは文化観念であると指摘している。文化観念は、価値観や信念、世界観といった抽象的かつ背景的な要素であり、文化理解の基盤を成す。しかし、『みんな』における文化観念はわずか 3 件にとどまり、全文化要素の中で極めて少ない割合しか占めていない。これは、初級段階の学習者にとってまず実用的な言語運用力を確立させ、その中で間接的に文化的背景を学ばせるという教育方針の反映と考えられる。

しかしながら、文化観念は異文化理解を深める上で欠かせない要素であり、学習者が表層的な文化知識だけでなく、その背後にある価値観や思考様式を理解することは、長期的な言語習得にも有益である。したがって、今後『みんなの日本語』初級シリーズにおいては、文化観念を扱う課や活動を適度に増やし、理念、価値観レベルでの文化理解を促す構成へと発展させることが望ましい。

6. おわりに

本研究では、『みんな』と『まるごと』初級教材に含まれる文化要素を比較分析し、その提示傾向と特徴を明らかにした。その結果、両教材とも日本文化に大きく焦点を当てつつも、提示する文化形式には差異が見られた。『みんな』より『まるごと』では文化観念が多く取り上げられていた。Moran (2004) が指摘する文化観念は文化理解の中核であるが、『みんな』における該当要素は極めて少なく、今後は価値観や信念など背景的理解を促す内容を適切に増やす必要がある。

しかし、本論文は初級日本語教材の文化要素の提示内容だけを考察した。今後は、初級教材にとどまらず、文化要素の提示方式にも着目し、さらに数の比較にとどまらず具体的な題材分析を行うことが望ましい。

文献

鈴木貴美子, 日本語教育における「日本文化」についての理論的・実践的考察—クリティカルペダゴジーの視点から[J]. ICU 日本語教育研究 2006(3):81-91

大川光基. 中学校英語検定教科書が扱う文化題材の考察—学習指導要領の改訂に伴う文化題材の扱いの変化[J]. 四国英語教育学会紀要 2012(13):95-104.

林傑暁, 櫻井千佳子. 中国と日本の中学校英語教科書の比較: 異文化理解とアクティブ・ラーニングを中心に[J]. 武蔵野教育學論集, 2019 (6):103-104.

松田真希子, 松田佳子. 『できる日本語』を用いた大学集中日本語教育の実践. [J]. 日本語教育方法研究会誌. 2016(1):36-37

Cortazzi, M. & L. X. Jin. Cultural mirrors: Materials and methods in the EFL classroom[A]In E. Hinkel (ed h). Culture in Second Language Teaching and Learning[C]. Cambridge: Cambridge University Press, 1999:196-219.

Gray, I. Introduction[A]. In J. Gray (ed) Critical Perspectives on Language Teaching Materials [C]. New York: Palgrave Macmillan. 2013:1-16.

Byram M, Morgan C & Colleagues. Teaching-and-Learning Language-and-Culture [M]. Clevedon: Multilingual Matters, 1994.

Moran P R, Teaching Culture: Perspectives in Practice [M]. Beijing: Foreign Language Teaching and Research Press, 2004.

Zhu H, Exploring Intercultural Communication: Language in Action [M]. London: Routledge, 2014.

朱桂荣, 关于日语教科书的文化呈现研究[J], 日本学研究, 2022, (01):122-141。

李加军, 大学通用英语教材的(跨)文化呈现研究[J], 外语界, 2023, (01): 66-75。

赵冬茜, 跨文化视域下基础日语教材研究——以《基础日语综合教程》为例[J], 高等日语教育, 2021, (02):44-51+163。

刘卫红, 中国文化导入基础日语教材策略研究[J], 青岛职业技术学院学报, 2018, 31 (04): 51-55。

刘卫红, 跨文化意识视角下基础日语教材语料研究[J], 青岛职业技术学院学报, 2017, 30 (04): 46-48。

张虹、李晓楠, 高中英语教材文化呈现研究[J], 外语教育研究前沿, 2022, 5 (04): 42-52+92。

张虹、李晓楠, 英语教材文化呈现分析框架研制[J], 中国语, 2022, 19(02):78-84。

葛囡囡, 中国德语教材文化呈现研究——以《当代大学德语》为例[J], 外语教育研究前沿, 2022, 5(04):61-68+93。

谈佳、张璐, 《法语》(修订本)的文化呈现研究[J], 外语教育研究前沿, 2022, 5 (04): 53-60+93。

张占一, 试议交际文化和知识文化[C], 文化与交际, 外语教学与研究出版社, 1994。

陆杨, 文化定义辨析[J], 吉首大学学报, 2006, 27 (01): 151-154。

胡文仲, 《跨文化交际学概论》[M], 外语教学与研究出版社, 2019。

张鹏, 中外大学英语教材文化呈现比较研究[J], 外语学刊, 2023, (04): 67-74。

刘静, 韩国语教材的中华文化呈现研究——以《新经典韩国语》为例[J], 外语研

究, 2025, 42(03):29-34。

李晓霞, 日语教科书中的中国文化要素研究[D], 山东师范大学, 2023。

徐安琪, 中国大学基础日语教材中日文化呈现研究[D], 北京外国语大学, 2023。

修刚, 转型期的中国高校日语专业教育的几点思考[J], 日语学习与研究, 2011, (04):1-6.

周宁, 基础日语教材中的文化要素研究[D], 哈尔滨师范大学, 2021。

刘杨, 近二十年外语教材文化呈现研究概况——基于中国知网的可视化分析[J], 跨文化研究论丛, 2024, (02):19-32+124。

属性叙述述語としての「x ならではの (の N)」

坂本 瑞生 (東北大学大学院) †

“x naradewa (no N)” as a Property Predicate

Mizuki SAKAMOTO (Tohoku University)

要旨・既発表の有無

現代日本語の「ならではの」という機能形式は「x ならではの y」という名詞修飾用法と「y は x ならではのだ」という述語用法を持つ。このうち、述語用法で用いられる「ならではの」が、叙述類型論における属性叙述を専ら形成するという仮説を提示し、その妥当性を検証する。具体的には、属性叙述は原則有題文となり、主語がガ格標示される場合には総記解釈だけを許すという前提を踏まえて、「ならではの」述語文の主語の標示形式のバリエーションと、ガ格標示された場合の意味解釈を調査し検討する。コーパス調査からは、「ならではの」述語文の主語はハ・モ・略題の標示形式を取ることが多く、ガ格標示された例はすべて総記解釈と考えられることを示す。また、内省判断調査からは、「ならではの」述語文が中立叙述のガと相容れないことを示す。以上の調査結果を踏まえた上で、属性叙述述語としての「ならではの」の特殊性は、「非知覚依存性」という語彙意味的性質に起因する可能性を指摘し、属性叙述が持つ「主観性」について新たな理解を提示する。

既発表無。

1. はじめに

本稿は現代日本語における機能形式「ならではの」が持つ特異な文法的性質を明らかにすることを第一の目的とする。そして、この具体的な形式の検討を通して、叙述類型論における「属性叙述」という概念の把握の仕方について理論的示唆を与えることをも目論む。

「ならではの」は前接名詞 x を伴って用いられ、「x に特有」といった意味をもたらす。この「x ならではの」句は名詞修飾用法（装定用法）と述語用法（述定用法）の両方を持つ。

- (1) a. 海 x ならではの 解放感 _y
b. この見方 _y は専門家 x ならではのだ (宮地(2022: 227))

コーパス調査に基づいて現代語「ならではの」の様相を明らかにした宮地(2022)によると、「ならではの」句の性質は次のようにまとめられる。

- (2) x は指示的な名詞であり、「ならではの」は、ある特性・特徴 y について、前接名詞 x を唯一的な属性主と位置づけ、述定／装定句を構成する、非自立的な体言性の機能形態である。 (宮地(2022: 235))

† mizuki.sakamoto.p7@dc.tohoku.ac.jp

なお、「x ならでは」が述語として用いられる述定タイプ I に対して、名詞修飾の形式「x ならではの y」全体が述語として用いられる用法も存在している。

(3) この見方 y は専門家 x ならでは の考え y だ

宮地は(3)のタイプを述定タイプ II と名付けている。述定タイプ I と装定タイプは言い換え関係が成り立つ。また、述定タイプ I と述定タイプ II の間にも意味的な対応が認められる。

(4) 述定タイプ I: y {は・も} [x ならでは] だ
⇕ ⇔ 装定タイプ: [x ならではの y]
述定タイプ II: y' {は・も} [x ならではの y] だ (宮地(2022: 241))

以上の記述を背景に、本稿では次の 2 点に着目したい。第一に、(4)において述定タイプの文の主語が「ハ」「モ」で表記されているという点である。これは記述上の便宜に過ぎないのだろうか。それとも、述語句「ならでは」は専ら（広義）有題文の形式を取るということなのだろうか。述定タイプが取る主語の性質について検討の余地が残る。この第一の点と関連して、第二に、「ならでは」の意味記述について「ある特性・特徴 y について、前接名詞 x を唯一的な属性主と位置づけ、述定／装定句を構成する」という記述に注目したい。「ある対象を取り上げて、それが有する属性を述べる」というのは、叙述類型論における「属性叙述」の特徴と合致する（益岡(1987, 2000, 2021)など）。そして、属性叙述は基本的に有題文の形式を取る。以上 2 つの点を総合して考えると、以下の仮説を考えることができる。

(5) 述語用法の「ならでは」句は専ら属性叙述述語を形成する

本稿では、コーパスを用いた事例調査と内省判断の両方を用いて、この仮説の妥当性を検討する。

本稿の構成は次の通りである。2 節では、本稿の議論を進めていく上での理論的背景について整理を行う。具体的には、「属性叙述」の規定と、述定タイプの「ならでは」文の文構造、の 2 点について議論を行う。3 節では、コーパス調査に基づいて「ならでは」述語文の主語がどのように標示されるのか、事例の様相を確認する。結論を先に述べると、「ならでは」述語文の主語はハ・モ・略題形式がほとんどである。ガ格主語もごく少数例見られるが、これらはすべて中立叙述ではなく総記解釈を受けていると考えられ、属性叙述の範囲に収まる。4 節では、内省判断に基づいてガ格を伴う「ならでは」述語文が中立叙述解釈を許さないということを改めて確認することで(5)の仮説の補強を行う。5 節では、なぜ「ならでは」句が属性叙述述語専用の形式として用いられるのか、その理由について検討し、「非知覚依存性」という意味的性質が(5)の仮説の背後に存在する可能性を指摘する。6 節はまとめである。

2. 理論的背景の整理

本稿は以下に再掲する仮説の妥当性を検証する。

(6) 述語用法の「ならでは」句は専ら属性叙述述語を形成する

この仮説の検証に当たっては、「属性叙述」という概念の理解が必須である。そこで、2.1 節では、本稿の前提となる「属性叙述」という概念を導入する。続いて「y は x ならではだ」文における属性主と属性はどの構成素に対応するか、という点について検討する。これらの点を踏まえて、仮説検証にあたって中核となる理論的な予測を明確化する。

2.1. 叙述類型論

日本語文法の研究では、(7a)のような出来事を表す文と、(7b)のようなある対象がある属性を持つということを表す文とが、異なるタイプとして区別されてきた。

- (7) a. 山田が論文を書いた [事象叙述]
b. 山田は言語学者だ [属性叙述]

特に益岡(1987, 2000, 2021)は、この区別を文の命題部分の類型の問題として位置づけ、前者を「事象叙述」、後者を「属性叙述」と名付けて区別した。

- (8) 事象叙述：現実世界の或る時空間に実現・存在する事象（出来事や静的事象）
を叙述する (益岡(1987: 21))
(9) 属性叙述：現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、
それが有する何らかの属性を述べる (ibid.)

事象叙述は述語が項を非対称的に選択する「内心構造」を持つものに対して、属性叙述では対象表示部分（「山田は」）と属性表示部分（「言語学者だ」）が対等に並置される二部構造を持つとされる。この構造の違いに対応する形で、事象叙述は典型的に無題文の形式を取るのに対して、属性叙述は典型的に有題文の形式を取るとされる。属性叙述の対象表示部分がガ格を取る場合、総記読みで解釈される(益岡(1987), 鈴木(2022))¹。これは、事象叙述のガ格が中立叙述の解釈を受けることと対照的である。

- (10) a. 山田が走った [事象叙述／中立叙述]
b. 橋本ではなく山田が優しい [属性叙述／総記]

以上の理解を前提にして、「ならでは」述語文が属性叙述に対応するという仮説を検証する。

2.2. 「y は x ならではだ」の文構造

「ならでは」述語文が専ら属性叙述に対応とした場合、対象表示部分と属性表示部分はどの構成素にあたるのだろうか。本論の議論の焦点を明らかにするために、続いて、この点について精査していくことにする。

宮地(2022)の記述を検討しなおすことにしよう。この記述に依拠するならば、(12)の対象表

¹ 久野(1973)は総記のガについて「～だけが」という意味を持つとしているが、この排他性・唯一性の意味は総記のガの本質とは言い難い。むしろ、総記のガは＜関心の対象＞である未知項 x を同定する「解答提示」の機能を持つと言ふべきであり、排他性は語用論的推意によって得られる意味だと考えるべきである(菊地(1997), 西山(2003))。

示部分は「専門家」、属性表示部分は「この見方」だということになる。

- (11) x は指示的な名詞であり、「ならでは」は、ある特性・特徴 y について、
前接名詞 x を唯一的な属性主と位置づけ、述定／装定句を構成する、非自
立的な体言性の機能形態である。 (宮地(2022: 235))

- (12) この見方_yは専門家_xならではだ (= (1b))

しかし、この把握は本当に妥当だろうか。y 名詞句「この見方」に指示詞「この」がついて
いることから分かる通り、y は定指示の名詞句である。これを「特性・特徴」と見なすこと
は自然とは言い難いように思われる。

上林(1998)や西山(2003)などの研究に基づけば、「X は Y」という形式のコピュラ文は大き
く措定文と（倒置）指定文に分類できる²。このうち、措定文の「X ハ」は指示的名詞句で
あるのに対して、倒置指定文は「x は犯人だ」のような解釈を持った変項名詞句である。

- (13) a. 山田は学生だ [措定文]
b. 犯人は山田だ [倒置指定文]

倒置指定文「X は Y」は語順を変えて「Y が X」に書き換えることができるが、措定文はそ
のようなパラフレーズができない。

- (14) a. 山田は学生だ ≠ 学生が山田だ [措定文]
b. 犯人は山田だ = 山田が犯人だ [(倒置)指定文]

以上を踏まえて「ならでは」述語文に立ち返ってみると、「Y が X」語順への書き換えがで
きないことから「ならでは」述語文は倒置指定文ではないことが分かる。

- (15) この見方は専門家ならではだ ≠ 専門家ならではがこの見方だ
≠ 専門家がこの見方ならではだ

そうすると、「ならでは」述語文は措定文だと考える方が自然だということになる。「y は x
ならではだ」が措定文であるならば、y は属性主（対象表示部分）であって、「x ならでは」
句が属性表示部分であると考えべきだということになる。したがって(16)に対する適切な
解釈は(17)のようなものだということになる。

- (16) この見方_yは専門家_xならではだ

- (17) 対象「この見方」は、「専門家ならでは（専門家に特有）である」という属性
を持つ

² 西山は更に細かなコピュラ文の分類を提示しているが、叙述類型の議論を行う上では、
西山の分類の細部にまで立ち入る必要はないと考えられる。大木(2024)を参照のこと。

以上を踏まえて、「ならでは」述語文を以下のように把握することにする。

- (18) 「ならでは」述語文とは、 x, y は指示的な名詞であり、属性主 y に対して「 x ならではである（= x に特有である）」という属性を帰する述語文である。

2.3. 予測

以上、叙述類型論の概要と、「 y は x ならではだ」の文構造について前提を確認した。このうち、以下の議論で特に重要になる点をまとめると以下のようになる。

- (19) a. 属性叙述は典型的に有題文であり、「が」格を取る場合には総記解釈になる。（事象叙述の「が」格は中立叙述として解釈される。）
b. 「 y は x ならではだ」は、「 y は」を対象表示部分、「 x ならではだ」を属性表示部分とする措定文（属性叙述）である。

以上の点を総合すると、「ならでは」述語文について次の予測を立てることができる。

- (20) 「ならでは」述語文は専ら有題文になる。主語が「が」格表示される場合には、総記解釈になる。

以降のセクションでは、コーパスに基づく事例調査と内省判断を併用してこの予測を検証していく。

3. コーパス調査

3.1. 調査の対象

本節では、「ならでは」述語文の主語がどのような形式によって標示されているのかを、事例観察によって検討する。用例データは現代書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) (山崎編(2014)) を、『中納言』(国立国語研究所(2025))を用いて検索することによって採取する。具体的には、「ならでは (だ・です)」で終わる述定タイプ I と、「ならではの N (だ・です)」で終わる述定タイプ II にあたる例をそれぞれ検索する。述定タイプ II の検索に際しては、N にあたる部分が長い句をなす事例も検索対象に含めるために、短単位検索ではなく文字列検索を活用する。それぞれの検索条件式は以下に示すとおりである。

- (21) 述定タイプ I の検索条件式（短単位検索）

キー: 書字形出現形="は" WITHIN 3 WORDS FROM 文末
AND 前方共起: 書字形出現形="なら" ON 2 WORDS FROM キー
AND 前方共起: 書字形出現形="で" ON 1 WORDS FROM キー
WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND
limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="500" AND
unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

- (22) 述定タイプ II 「ならではの N だ」の検索条件式（文字列検索）

キー: 全文検索 @@ "ならではの%だ"

WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND keyDisplay="2" AND resultUnitWord="long" AND targetString="2" AND tglWords="50" AND unit="3" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF";

(23) 述定タイプⅡ「ならではのNです」の検索条件式（文字列検索）

キー: 全文検索 @@ "ならではの%です"

WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND keyDisplay="2" AND resultUnitWord="long" AND targetString="2" AND tglWords="50" AND unit="3" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF";

以上の条件で検索した用例を目視で確認し、述語用法ではない用例を除外した上で、主語の標示形式を調査することにする。

3.2. 調査結果

まず述定タイプⅠ「ならでは（だ・です）」の調査結果を挙げる。

(24) 「ならでは（だ・です）」の主語の標示形式

	用例数
ハ	34
モ	31
略題	7
ガ	2
その他	1（ッテ）
合計	75

ハ・モによる標示例が多く、全体の9割近くを占めている。典型的な例を以下に挙げよう。

(25) a. ちょこちょこ色々な種類を食べれるというのは、バイキングならではでしょう。
(Yahoo!ブログ、OY03_03911)

b. 周囲のきれいなぼけはデジタル一眼レフならでは。
(『YOMIURI PC』、PM55_00165)

(26) a. 内臓料理、ウサギやシカなどジビエ（狩猟肉）もフレンチならでは。
(『パリ』、LBs2_00056)

b. また、床から天井までの部屋全体を均一に暖めるのも、床暖房ならではです。
(『おしゃれなマンション暮らし術』、PB45_00282)

ハ・モに次いで、先行文脈から主題を復元できる主題省略（略題）の形式が見られる。

(27) a. [ゆでたまごの食べ方について]でも、白身まで黄色くして食べる食べ方もあります。黄色好みのわがインド人ならではです。

(『シンさんの印度料理夜話』、LB15_00046)

- b. しかし本作ではデスチャで見せるスタイルとは打って変わって、しっとりと大人のブラック・ミュージックを聴かせてくれます。ゴスペルをルーツに持つ彼女ならでは。

(『B o o n (ブーン) 2002 年 7 月号』PM21_00227)

以上の例では、「この食べ方は」「この歌声は」といった要素が文脈上復元可能である。主語標示にガが用いられる例はわずか 2 例である。2 例とも以下に挙げよう。

- (28) a. 網タイツでほんの少し毒をプラスするのがモスキーノならでは。

(『G I N Z A 2004 年 6 月号』PM41_00160)

- b. 金の使い方。またこれが性に奔放な女性ならでは！

(Yahoo!知恵袋、OC05_01676 の例を一部改変³)

(28a)の例は、いくつかの新作商品の特徴を順に述べていくという文脈で用いられている。したがって、「モスキーノの新作商品の特徴は何か」が問題になっている文脈で「網タイツでほんの少し毒をプラスする (こと)」を提示していると考えられ、総記用法のガに該当する。同様に、(28b)の「これ (=金の使い方)」も、性に奔放な女性に特有のものとして卓立して提示されており、総記用法のガに該当すると考えることができる。最後に、「ッテ」による主題標示の例が 1 例見られた。

- (29) 桜を乗せたりするのって、この時期ならでは♪

(Yahoo!ブログ、OY03_10849)

続いて、述定タイプⅡ「ならではの N (だ・です)」の調査結果を見てみよう。

- (30) 「ならではの N (だ・です)」の主語の標示形式

	用例数		
	ならではの N だ	ならではの N です	合計
ハ	27	16	43
モ	10	9	19
略題	37	26	63
ガ	4	1	5
その他	4 (コソ 1、ゾ 1、トイエバ 1、トテ 1)	2 (ッテ 1、ナド 1)	6
合計	82	54	136

³ 原文は侮蔑的な表現が用いられており、倫理的観点から用例の表現を一部改変して引用している。改変に当たっては、文意や統語構造には変更が加わらないように配慮した。

述定タイプⅡでも、ハ・モ・略題の使用例が多い。例を挙げておこう。

- (31) a. これまでにない正確さで定期的に更新されるデータは、衛星ならではもの
のだ。 (『暴走するプライバシー』、LBp3_00114)
b. これは会員制ならではのメリットです。
(『はじめてのパソコン』、LBn5_00063)
- (32) a. とはいえ、普段なかなか近づけないところに足を向けてみるのもゴールデン
ウィークならではの楽しみ方だ。
(『エコノミスト 2001 年 4 月 24 日号』、PM13_00034)
b. パワー・コード (ボードと足首を結び付けておく紐) も、サーファーなら
ではの小道具です。 (『見栄講座』、OB2X_00294)
- (33) a. アゴ (トビウオ) のダシで食べたいどんは、シンプルだがおいしかった。
まさに五島ならではの味わいだ。 (『船の旅』、PM21_00718)
b. セブン銀行の中間配当支払い通知が到着しました。ホルダーならではのお
楽しみです。 (Yahoo!ブログ、OY01_02287)

ガの例も少数ながら認められる。全例を挙げよう。

- (34) a. あとは箸とか焼魚の串が、竹ならではものと言えるだろう。
(『アウトドア・ナイフの使い方』、LBd5_00025)
b. こういうありふれた建物の中に、驚くほど仕掛けがたくさん入っていると
いうのが、マンローさんならではのセットだ。
(『8 時だヨ！全員集合の作り方』PB16_00054)
c. [...]顧客ごとに違う要望に合わせて、提案内容も商品もサービスも価格も
すべて、相互に意見交換しながらその場で瞬時に変化できる。それがイン
ターネット上ならではのビジネス・デザインということだ。
(『顧客と共に"進化"する企業』、PB16_00099)
d. 今にして思えば、さすがに彼女のその卓越した感じ方そのものが、世界帝
国を築いた英国の人ならではの反応だと思う。
(『失われた時のために』、PB20_00098)
e. そしてなによりも、安くないのに買ってしまいうのがまたまた限定品ならで
はの誘惑です。 (Yahoo!ブログ、OY14_43239)

(34a)は竹を活用して作ることができるものについて説明している文章であり、「箸とか焼き魚の串」はその答えとして提示されている。(34b)はテレビ局職員であるマンローさんの際立った資質を説明している内容であり、その資質としてガ格項が提示されている。(34c)ではインターネット上のビジネスの特徴は何かを問題として、「それ (=顧客に合わせて商品、サービス、価格を変更できること)」を答えとして提示している。(34d)でも「彼女の卓越した感じ方」を特に問題として取り上げて「英国人ならではの反応」として示している。(34e)でも、「そしてなによりも」という表現が付されていることから分かる通り、「安くないの

に買ってしまう」ことを、限定品に特有の性質として卓立して提示している。これらの例はどれも総記のガに該当する例だと考えられる。

このほか、コソ・ゾ・トイエバ・トテ・ツテ・ナドを用いた例が1例ずつ見られた。

- (35) a. 十二日目、勝ち越しを決める一番で琴龍を立ち合い変化のはたき込みで破った。「とっさですよ」これこそこの男ならではの相撲の勘？だ。
(『大相撲』、PM11_00798)
- b. 「醜のなかに真実在の美を探り出した」のである。これぞまさしく、日本人ならではの魂がつくりだした創造的美学であったから、彼らは勇躍、茶の湯の美にのめり込んでいったのである。(『千利休の創意』、LBj7_00059)
- c. 十シリングのお金といえば、市長さんの財布ならではの大金だもの。
(『マザー・ボムビー』、LBj9_00094)
- d. 早いペースを保ったまま、先頭交代もせずにここまで集団を引いてきた力量は認めないでもないが、それとて結局は無知な素人ならではの所業だ。
(『銀輪の覇者』、PB49_00364)
- e. オリンピックでサッカーの試合の前に日本選手が“手に胸を当てて国歌斉唱”していますが、これってオリンピックならではのものですか？
(Yahoo!知恵袋、OC06_03932)
- f. i D i s kの「D o c u m e n t s」フォルダなどに手動でドラッグ・コピーすれば、同様のことを実現できますが、数多くの項目をバックアップしたり、以前の履歴を管理するとか、定期的に自動バックアップするなど、ドットM a cならではのサービスが魅力です。
(『mac 徹底使いこなし術』、PB25_00008)

3.3. 考察

調査の結果をまとめて再掲しよう。

(36) 「ならでは」述語文の主語の標示形式

	述定タイプⅠ	述定タイプⅡ	合計
ハ	34	43	77
モ	31	19	50
略題	7	63	70
ガ	2	5	7
その他	1	6	7
合計	75	136	211

この調査結果から、「ならでは」述語文の主語は、宮地(2022)の記述の通り、ハ・モで標示されることが多いことが分かる。また、ハ・モに加えて略題のケースも同数程度認められることが新たに判明した。これらの例は属性叙述の範囲に収まる例として把握できる。「ならでは」述語文の主語がガで標示されることは極めてまれであり、ガ格の例はどれも総記のガの解釈に相当する例であり、中立叙述のガの用例は認められなかった。「その他」の例のうち

「ッテ・トイエバ・トテ・ッテ・ナド」は提題助詞であり有題文に数えて差し支えない。「コソ・ゾ」は焦点解釈を受けていると考えられ、総記ガの類例として把握できる。したがって、「その他」に含まれる例もまた、属性叙述の範囲に収まると考えて良いだろう。

以上から、「ならでは」述語文は専ら属性叙述文として用いられている、という使用実態が明らかになったと言える。この結果は、以下に再掲する本稿の予測と合致している。

- (37) 「ならでは」述語文は専ら有題文になる。主語が「が」格標示される場合には、総記解釈になる。

以上から、コーパスに基づく実例観察の結果は、「ならでは」が専ら属性叙述述語として用いられるという本論の仮説を支持するものと理解できる。

4. 内省判断に基づく分析

前節では、コーパス検索に基づく実例観察によって、「ならでは」述語文が専ら属性叙述文を構成することを確認した。ただし、実例観察に基づく分析は、ある表現が「用いられている／用いられていない」ということを示すのみであって「ある表現がそもそも使用不可能・非文法的である」ことまでを示すわけではない。したがって、ここまでの検討では「「ならでは」が事象叙述として用いられる例が見つからない」ということまでしか言えず、「事象叙述としては使えない」ということまでは含意していない。「言えない」ことを示すためには、内省判断に基づく文法性判断データが必要である。そこで、ここまでの議論を補完するために、「ならでは」述語文が中立叙述のガで用いることができないということを、作例の内省判断を根拠に確認しておこう。

ガを伴う「ならでは」述語文は、総記解釈をもたらす文脈では極めて自然に解釈できる。

- (38) a. ただの焼肉ではなく、牛タン（こそ）が仙台ならではだ
b. ただの焼肉ではなく、牛タン（こそ）が仙台ならではの味だ

他方、眼前描写的な状況を与えて中立叙述解釈を強制すると、途端に容認度が低下する⁴。

- (39) [テーブルに出された料理を見て]
a. *{これが／牛タンが}仙台ならではだ！
b. *{これが／牛タンが}仙台ならではの味だ！

このような例を無理やり解釈しようとすると、どうしても「他の料理ではなく」という排他的・総記的な解釈にせざるを得ない。以上の観察は「ならでは」述語文がガを伴う場合には総記解釈に限定され、中立叙述解釈とはそぐわないことを示している。ことことから、「ならでは」述語文は事象叙述として用いることができないと結論付けることができる。「ならでは（のN）だ」は属性叙述述語専用の形式なのである。

⁴ 例外として、終助詞カを用いて詠嘆的解釈を付した場合には眼前描写が可能になる。

(i) これが仙台ならではの味か！

5. 「ならでは」の特殊性は何に起因するのか

3節、4節では、実例観察および内省判断の2つのデータに基づいて以下の仮説の妥当性を検証してきた。

(40) 述語用法の「ならでは」句は専ら属性叙述述語を形成する

この結論は、実のところ自明なものではない。なぜならば、同じ述語が事象叙述／属性叙述にまたがって用いられ得ることが既に先行研究において指摘されているからである。たとえば「白い」という形容詞は典型的に属性叙述を形成するものの、事象叙述として用いられることもあり得る。

- (41) a. 雪は白い [内在的属性叙述] (益岡(2000: 45))
b. 雪が白い [静的事象叙述] (眞野(2008: 69))

このような叙述類型間の「揺れ」が「ならでは」には認められないとするならば、それは何故なのかということが問題になるだろう。「ならでは」が一意に属性叙述としてだけ用いられるとしたとき、そのことは何によって保証されているのだろうか。

事象叙述と属性叙述の違いを特徴づける観点として、述語品詞が指摘されることが多い。(42a)の事象叙述は動詞述語文である一方、(42b)の属性叙述は非動詞述語である。

- (42) a. 山田が論文を書いた [事象叙述／動詞述語文]
b. 山田は言語学者だ [属性叙述／名詞述語文]

以上のような特徴を踏まえると、品詞性が、「ならでは」を特徴づけていると考えたくなるかもしれない。しかし、この観点によって「ならでは」の特殊性を捉えることは困難である。

「ならでは」の品詞について、宮地(2022)は「独自 (の)」「特有 (の)」といった「第三形容詞」との類似性を指摘している(第三形容詞については村木(2012)を参照)。このことを踏まえるならば、第三形容詞という品詞が、専ら属性叙述述語を提供しているという可能性を考えることができるかもしれない。確かに、村木(2010)があげる第三形容詞の例の中には、専ら属性叙述としてしか使われないように見える例がある。たとえば「万能の」「無名の」「清廉潔白の」「無届けの」などは、中立叙述のガとは相いれず、総記のガの場合にのみ容認度が安定するように思われる。

- (43) a.*おや、調味料が万能だ
cf. 醤油じゃなくて、味噌のほうが万能だ
b.*おや、作家が無名だ
cf. 俺よりも、あの作家のほうが無名だ
c.*おや、彼女が清廉潔白だ
cf. あいつは善人なんかじゃない。彼女の方こそが清廉潔白だ。
d.*おや、デモが無届けだ
cf. あのデモではなく、こっちのデモが無届けだ

ところが、第三形容詞であれば必ず属性叙述になるのかと言うと、そうではない。例えば、村木(2010)が第三形容詞の例として挙げる例の中で「からっぽの」「吸いかけの」「どろまみれの」「丸見えの」などは中立叙述のガを許し、事象叙述としての用法を持つ。

- (44) a. おや、教室がからっぽだ
b. おや、タバコがまだ吸いかけだ
c. おや、子供たちの洋服がどろまみれだ
d. おや、外から部屋の中が丸見えだ

以上のようなことを考えると、第三形容詞（との連続性）という品詞的特徴をもって「ならでは」の特殊性を説明するわけにはいかない⁵。

では、「ならでは」の特殊性は何に起因するのであろうか。本稿では「非知覚依存性」という性質がその答えを握っていると考えたい。先ほど挙げた(43)と(44)の例を見比べてみよう。(43)の事態はどれも、眼前の事態だけから真偽を判定することができず、何らかの世界知識に依存して物事を評価しなければならない。たとえば、ある調味料が「万能」であるかどうかは、目の前にその調味料が置かれているだけでは判断できない。実際にそれを使って料理を作った経験や、料理についての世界知識があってはじめて、その調味料が「万能」であると言える。この意味で、(43)に挙げた述語や「ならでは」は、いずれも「非知覚依存的」な述語である。

他方、事象叙述を許す(44)の述語は、どれも眼前の事態を見ることによって直ちに真偽を判断することができる。部屋のあり様を見れば、ただちにそこが「からっぽ」であることが分かるし、灰皿に置かれたタバコに火がついているのを見れば、それが「吸いかけ」であることが直ちに判断できる。こうした意味で、(44)の述語はどれも「知覚依存的」な述語である。(41)に挙げた「白い」もまた、知覚依存的な述語であり、そのために事象叙述解釈が可能になっているのではないと思われる。

なお、知覚依存性という性質は、「見た」という知覚動詞の補文に生起できるかという観点からテストすることもできる。

- (45) a.* 山田は、牛タンが仙台ならではなのを見た
b.* 山田は、あの作家がまだ無名なのを見た

⁵ 俣平洸希氏（個人談話）と山下大希氏（個人談話）より、「ならでは」述語文の特異性を名詞述語文であるという特質から導くことはできないのか、という指摘をそれぞれ独立に受けた。すなわち、述定タイプⅠ「yはxならではだ」は全て述定タイプⅡ「y'はxならではのyだ」のyの省略として分析した上で、名詞述語文が典型的に属性叙述になるという事実に基づいて「ならでは」述語文が属性叙述を構成する事実をも導き出せるのではないか、という指摘である。確かにそのような可能性には一考の余地があるが、この説明が成り立つためには「名詞述語文であれば必ず属性叙述文になる」という前提が成り立たなければならない。ところが、影山(2012:5)が指摘するように、名詞述語文が事象叙述になる場合が存在するため(cf.「契約書は今のところ白紙だ」)、この前提は成り立たない。したがって、やはり、述語品詞に基づいて「ならでは」述語文の特異性を説明することには困難があると言わなければならない。

- c.* 山田は、彼女が清廉潔白なのを見た
- d.* 山田は、デモが無届けなのを見た

- (46) a. 山田は、教室がからっぽなのを見た
 b. 山田は、タバコが吸いかけなのを見た
 c. 山田は、子供たちの洋服がどろまみれなのを見た
 d. 山田は、外から部屋の中が丸見えなのを見た

以上のように考えると、「ならでは」の特殊性を特徴づけるのは、その「非知覚依存性」という語彙意味的特性であると考えることができる。話者の世界知識に依存して真偽を判定するという意味で、これらの表現は「話し手の思考のなかで作り出される事態であるという点において主観的な叙述」(益岡(2021: 3))をなすと言えるだろう。他方、知覚依存的な述語は「話し手が事象の観察者(知覚者)であるという点において客観的な叙述」(益岡(2021: 3))であるということができるかもしれない。

ここで、非知覚依存性という性質を、時間性の問題に還元することはできない点に注意されたい。なぜならば、非知覚依存的な述語であっても、時間を限定する修飾表現と共起可能だからである。

- (47) a. 牛タンは、今はまだ仙台ならではの味だが、いずれ全国に普及するだろう
 b. この作家は、今のところは無名だが、あと数年もすれば有名になるだろう

以上、「ならでは」の特殊性を特徴づける要因として「非知覚依存性」という性質を指摘した。無論、以上の議論は内省判断に基づく文法性判断データのみに基づいているという点で予備的考察の範囲に留まる。今後、コーパス調査に基づく実例観察などの手法も用いて、以上の議論を実証的に検証していく必要があるだろう。

6. 結語

本論は、(48a, b)のような、述語用法の「ならでは」の使用実態について検討し、(49)の仮説を支持する議論を行った。

- (48) a. この見方_yは専門家_xならではだ
 b. この見方_yは専門家_xならではの考え_yだ

- (49) 述語用法の「ならでは」句は専ら属性叙述述語を形成する

また、「ならでは」が属性叙述にしか用いることができない理由を「非知覚依存性」という語彙意味上の性質に帰する可能性を指摘した。

従来の叙述類型論の議論では、同一の述語が事象叙述と属性叙述の両方で用い得るために、用例のテストに曖昧さや分析者の主観が入り込む余地がある、という問題があったように思われる。これに対して、本論の議論が正しいならば、「ならでは (のN)」という述語は、属性叙述に限った性質を明らかにするための分析対象として、格好の素材を提供してくれることになる。こうした点で、本論の分析結果は、叙述類型論に対して分析方法上の新たな

手掛かりを提供することができる。

また「ならでは」の特殊性を特徴づけるものとして「非知覚依存性」という概念を新たに導入した。述語の非知覚依存性をテストするための方法やその定義については今後更に精密化を行う必要があるものの、文法分析上の概念として有効な視座を提供するものと思われる。この概念の経験的射程については、今後の検討課題としたい。

最後に、言語分析の手法に関して一点述べておきたい。本論ではコーパス調査に基づく実例観察と、内省判断に基づく文法性判断データを組み合わせる形で議論を展開した。これは、この2つの手法が、それぞれ明らかにできる事柄が違っているためである。実例観察は、分析者の恣意的判断を排除して言語使用の実態に迫ることができる一方で、「ある表現が原理的に言えない（非文法的である）」という結論を引き出すことまではできない。この点に関連して、益岡(2003)は次のように指摘している。少々長くなるが、引用しよう。

- (50) それでは、日本語の表現における形式と意味の相関に関する母語話者の言語知識（その具体的な姿）を明らかにするにはどのような方法を採用すればよいのだろうか。まず考えられるのは、実際に使われている具体的な表現の中から規則性を見つけ出していくという方法である。身近な使用状況、つまり具体的なデータを重視するというやり方である。データには実例と作例がある。実例とは現実で使用されたものであり、作例とは分析の目的に合わせて人工的に作成されたものである。実例は現実をよくつかむのに適しているし、作例は仮説の検証などに有効である。実例がよいか作例がよいかという点をめぐってよく議論になることがあるが、データとしてはどちらも利用されるべきである。実例であれ作例であり[ママ]、活用できるものは最大限活用し、よりよい文法構築を目指すべきである。
(益岡(2003: 10))

天野(2022)の以下の記述もまた、同様の問題意識を共有した指摘として受け止められるべきだろう。

- (51) このように実例観察は言語学にとって非常に重要なものであるが、決定的な欠点がある。それは、当該の実例が「あるか無いか」「ある場合にはどのような率で現れるか」という数量的な調査結果に関し、あるがままに受け入れざるを得ないということである。既に述べたように、限られた範囲で行わざるを得ない実例収集調査では、あると予想される実例が出現しない場合もあるし、逆に無いはずと予想される実例が出現する場合もある。しかし、恐らく誤用で不自然さを伴う形式であっても、出現したことを歪曲することはできず、自然な形式と同等に一例として数えられることになる。次節で述べるように、言語は「あるか無いか」という二分で捉えるだけでは不十分であり、出現する実例であっても、それらには自然さ（文としての容認度）の違いがある。[...]こうした欠点をカバーし、言語形式間の自然さの違い・意味の違い等の質的な違いをより柔軟に考察するためには、次節の内省判断調査が必要である。
(天野(2022: 6-7))

要するに、分析手法・データの違いは、それが明かにできる事柄の違いに対応しているのだ

ということである。

現実には、「日本語文法の研究（特に「記述」ということを前面に出す研究）」において、「文法性判断」に基づく研究は、現状では、従来の活発さは失われてしまったと言わざるを得ない」（三宅(2017: 9)）と指摘されている。しかし、そのような状況は望ましいものとは言えない。事例調査による研究と内省判断調査による研究のどちらが選ばれるべきかということは、ひとえに「何を明らかにしようとするか」という研究目的やリサーチ・クエスションの違いに起因するものにほかならず、適切に手法が選択されている限りにおいて、調査手法の違いが研究の質や妥当性の違いをもたらすわけではない。その意味で、事例も作例も等しく文法研究における証拠（evidence）になりえるのだ、という点を強調しておきたい。

謝 辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2114 の支援を受けている。

文 献

- 天野みどり(2022)「現代日本語文法研究の二つのアプローチに関する考察」『大妻国文』53, 1-17.
- 大木一夫(2024)「名詞述語文と叙述類型」『東北大学文学研究科研究年報』73, 1-37.
- 影山太郎(2012)「属性叙述の文法的意義」影山太郎（編）『属性叙述の世界』3-35, くろしお出版.
- 上林洋二(1998)「指定文と指定文：ハとガの一面」『文藝言語研究 言語篇』14, 57-74.
- 菊地康人(1997)「「が」の用法の概観」川端善明・仁田義雄(編)『日本語文法 体系と方法』101-123, ひつじ書房.
- 鈴木彩香(2022)『属性叙述と総称性』花鳥社.
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- 益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版.
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版.
- 益岡隆志(2003)『三上文法から寺村文法へ：日本語記述文法の世界』くろしお出版.
- 益岡隆志(2021)『日本語文論要綱：叙述の類型の観点から』くろしお出版.
- 眞野美穂(2008)「状態述語文の時間性と叙述の類型」益岡隆志（編）『叙述類型論』67-91, ひつじ書房.
- 宮地朝子(2022)「現代日本語「ならでは」の用法」斎藤倫明・修徳健（編）『語彙論と文法論を繋ぐ：言語研究の広がりを見据えて』227-251, ひつじ書房
- 三宅知宏(2017)「文法性判断に基づく研究の可能性」『日本語文法』17(2), 3-19.
- 村木新次郎(2012)『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房.
- 山崎誠（編）(2014)『書き言葉コーパス—設計と構築—』朝倉書店

関連 URL

国立国語研究所（2025）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（バージョン 2021.03, 中納言バージョン 2.7.3, 分類語彙表情報 2025.03）<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>

比喩のフレーミング機能の実証的な対照研究： 日本と英国における Amazon レビューのレトリック

小松原 哲太（神戸大学）[†]

An Empirical Contrastive Study of Metaphorical Framing in Amazon Reviews: Rhetorical Strategies in Japan and the UK

Tetsuta KOMATSUBARA (Kobe University)

要旨・既発表の有無

ある対象の特定の側面を強調することで、その定義や因果関係の理解、評価を誘導する比喩のフレーミング機能は、近年世界的に注目を集めている。しかし、実証的なデータを用いた量的な対照研究によって、比喩によるフレーミングの普遍的特徴を解明する研究はなされていない。本研究では、ガルシア＝マルケス『百年の孤独』の日英翻訳版に対する日本と英国の Amazon レビューから抽出したテキストを対象として、比喩を網羅的に同定、意味的特徴をアノテーションし、その作品評価のフレーミングのパターンを分析した。その結果、読書経験を＜旅＞に喩えて否定的評価を表出する方略が日英語で広く観察された。言語特有のフレーミングとしては、日本語では＜魔法＞の比喩が多く、英語では＜織物＞の比喩が多くみられた。本研究の知見は、文学作品を鑑賞し、その価値を評価するという主観性の高い経験を評価するレビューの言語特徴の一端を明らかにするもので、ウェブ上の購買行動に影響を与える商品評価のレトリックの特性の通言語的な解明につながるものと言える。

なお、本発表は The 17th Researching and Applying Metaphor Conference の発表 ‘Metaphorical framings in customer reviews: Rhetorical strategies of Amazon reviews in Japan and the UK’ を拡張したものである。

1. はじめに

比喩（隠喩とそれに関連する修辞技法）は、ある対象をフレーミングする機能をもった実用的な言語技術であり、比喩のフレーミング機能は現在世界的に関心を集めている (Burgers, Konijn, and Steen 2016, Boeynaems et al. 2017, Semino, Demjén, and Demmen 2018, Komatsubara 2023, 2024)。「フレーミング」とは、ある対象の特定の側面を選択的に強調することによって、それに対する定義や因果関係の理解、評価、さらには態度を特定の方向へと導く働きを指す。例えば Hendricks et al. (2018) は、比喩を用いた「修辞的フレーミング」の働きが医療場面で感情に影響することを論じ、がん治療を＜戦い＞に喩える場合は、＜旅＞に喩える場合に比べ、病気から回復しなかった患者が抱く罪悪感に共感しやすい傾向があることを示した。この修辞的フレーミングは、社会

[†] komatsubara.tetsuta@gmail.com

的・文化的な文脈で多角的に研究が進められている (Burgers, Konijn, and Steen 2016)。

修辭的フレーミングが我々の評価や行動に影響するジャンルとして、Amazon の商品レビューなどの、ウェブ上の「クチコミ」がある。インターネット上で商品を買ったり、コンテンツを閲覧したりするときに、レビューの評価を参考にすることは近年多くなっている (Mudambi and Schuff 2010)。オンラインの評価情報の伝播はグローバルな社会現象である。人の消費行動を促進／抑制するような評価方略が言語文化に依存したものかどうかは、言語間を比較しなければ判断できないが、言語文化を問わず使われる普遍的な方略は、グローバル市場で大きな影響力をもつと想定できる。そこで本研究ではフレーミングの観点から、クチコミに使われる比喩の言語間比較を行い、ウェブ上の商品評価に用いられる比喩の普遍的な方略について新たな知見を得ることを目指す。

比喩のフレーミング機能は、コミュニケーションにおける態度、評価、意志決定、行動などの変容に関わる言語の高次機能であり、言語の基本的な構造や機能の研究と比較すると、実証的な言語学的研究の蓄積は進んでいない。また、フレーミング機能の成立には言語文化の詳細な背景知識が関与しているが、言語間を比較によって、通言語的なフレーミングの特性を抽出する試みはなされていない。本研究は、実証的なデータを用いた量的な対照研究によって、ウェブ上のクチコミの修辭的フレーミングの普遍的特徴を解明することを目的とする。本発表では、この研究プロジェクトの事例分析の 1 つとして、文学作品の日英翻訳書に対する日本と英国の Amazon レビューの日英対照分析を行い、ウェブ上の言説のフレーミング方略について新たな知見を得ることを目指す。

2. 方法

2.1. データ

日本語のデータは、Amazon.co.jp におけるガブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』（新潮社、2024 年）に対する 2024 年 11 月 5 日時点のコメント付きレビュー 163 件のうち、「トップレビュー」として表示される 100 件のレビューである。英語のデータは、Amazon.co.uk における Gabriel Garcia Marquez, *One Hundred Years of Solitude* (Penguin, 2014) に対する 2024 年 11 月 5 日時点のコメント付きレビュー 1,620 件のうち、「Top reviews」として表示される 100 件のレビューである。投稿された国を確認し、100 件のレビューが、日本語のデータは日本からの投稿、英語のデータは英国からの投稿のみであることを確認した。各レビューについて、レビューの本文、タイトル、投稿日、星評価（1～5）、「参考になった」(Helpful) の数、投稿日を記録した。なお、コメントなしのレビューも含めると、日本語のレビュー総数は 390 件、星評価の平均は 4.1、肯定的なレビュー（星評価が 4 または 5）は 292 件で全体の 74.9%を占めた。英語のレビュー総数は 13,082 件、星評価の平均は 4.4、肯定的なレビューは 10,882 件で全体の 83.2%を占めた。

『百年の孤独』は 1967 年にスペイン語で出版された小説である。著者ガルシア＝マルケスはコロンビアの小説家で、マジックリアリズムの旗手として知られ、1982 年にノーベル文学賞を受賞した。同作品は日本、英国の両国で多くの場合異文化と感じられる南米文化を背景としている。ガルシア＝マルケスの代表作であり、両国の Amazon で多くのレビューがある。

分析対象とするレビューの商品カテゴリーを選定する上で、小説は、商品の質が主観的にしか評価できず事前に情報が得にくい「エクスペリエンス商品」 (Mudambi and Schuff 2010:

191) であり、閲覧者が比喩の影響を受けやすいと考えた。また、異文化を背景とした物語を説明したり、評価したりするためには、より身近な経験や事物を通じた表現が必要になると考えられ、その際にも比喩によるフレーミングが何らかの役割を果たすのではないかと想定した。

2.2. 比喩の分析

隠喩同定法 (metaphor identification procedure; MIP) (Pragglejaz Group 2007) の基本方針に従って、レビューの本文およびタイトルから比喩表現を網羅的に抽出した。具体的には、まずテキストを語レベルの単位に区切り、文脈上の意味が、基本的な意味（具体性、身体性、明瞭性が高い意味）と異なるものに注目する。そのなかで、文脈上の意味と基本的な意味が類似性にもとづいて対応づけられるものを比喩とする。例えば (1) の下線部「味わい」「入り口」「立つ」を比喩として抽出した。MIP では隠喩、直喩、諷喩は区別されないため、これらをすべて比喩として同定対象とした。(1) の「入り口に立ったくらいの気分」は、「くらいの」という比較表現が比喩性を明示するので直喩の例であるとも言える。助詞などの文法形式は分析対象に含めなかった。

- (1) まだ本書を味わい尽くしたとは思えず、その入り口に立つたくらいの気分ではあるけれど、まずは傑作、と言っておきたい。
(☆5「面白かった」参考になった：42, 2024 年 8 月 4 日)

本研究では、比喩の文脈上の意味は目標領域 (target domain) に属し、基本的な意味は起点領域 (source domain) に属すると考える。例えば「味わい」の文脈上の意味は、文学作品の鑑賞という目標領域に属し、基本的な意味は、食事という起点領域に属する。比喩表現の計数は、基本的に語単位で行った。ただし、同一の起点領域をもつ比喩が連続して出現し、句レベルの比喩となる場合には 1 例とみなした。例えば (1) では「味わい」は<食事>の比喩として 1 例とみなし、「入り口」「立つ」は<旅>の比喩として 1 例とみなした。

評価のフレーミングを与える概念領域という観点から、比喩の起点領域のボトムアップな分類を試み、考察対象となるすべての比喩表現が分類できる起点領域のカテゴリーとして、力動性、旅、文学（『百年の孤独』以外の文学作品やその著者）、視覚、織物、魔法、水、容器、聴覚、音楽（楽曲名やアーティスト名）、人、文化（特定の文化圏に固有の事物）、絵画（作品タイトルやアーティスト名）、植物、戦い、建築、経済、食物、パーティ、嗅覚、タスク、映画（作品タイトルや監督名）、火、ドキュメンタリー（番組名）、昆虫、物理、風という 27 個を仮定した（なお、この順に頻度が高かった）。

同様の観点から、目標領域についてもボトムアップな分類を試み、内容（作品内容の特徴を比喩的に表すもの）、体験（読書体験を他の経験になぞらえるもの）、価値（作品の美しさや面白さなどを喩えるもの）、メタ情報（作者や作品を別の作者や作品に見立てて表すもの）の 4 つを仮定した。この 4 つを組み合わせると、<メタ情報>をもった作品の<内容>を<体験>しく<価値>を評価する、という鑑賞のフレームが構成される。

3. 結果

日本語のレビュー100 件から抽出された比喩は 99 件で、比喩表現が 1 つ以上含まれているレビュー（40 件）あたりの比喩件数は 2.5 件であった。英語のレビュー100 件から抽出さ

れた比喩は 133 件で、比喩表現が 1 つ以上含まれているレビュー（49 件）あたりの比喩件数は 2.7 件であった。最も多くの比喩が使用されていたレビューにおける比喩件数は、日本語で 12 件、英語で 15 件で、数名のレビューワーが突出して多くの比喩を使用していた。比喩表現を使用していたレビューの割合、比喩表現の頻度、1 レビューあたりの比喩の頻度の最高値について、日本語と英語のデータには類似した傾向がみられたと言える。

表 1 は比喩の起点領域の分類結果の日英比較である。＜力動性＞と＜旅＞の比喩がこの順に最も割合が高いことが日英に共通していた。＜文学＞、＜視覚＞、＜織物＞の比喩は英語に多く、＜魔法＞の比喩は日本語に多かった。

起点領域	日本語	英語	合計
力動性	22 (22.2%)	28 (21.1%)	50 (21.6%)
旅	22 (22.2%)	17 (12.8%)	39 (16.8%)
文学	5 (5.1%)	13 (9.8%)	18 (7.8%)
視覚	4 (4.0%)	14 (10.5%)	18 (7.8%)
織物	1 (1.0%)	14 (10.5%)	15 (6.5%)
魔法	11 (11.1%)	3 (2.3%)	14 (6.0%)
水	5 (5.1%)	7 (5.3%)	12 (5.2%)
容器	2 (2.0%)	4 (3.0%)	6 (2.6%)
聴覚	2 (2.0%)	4 (3.0%)	6 (2.6%)
音楽	5 (5.1%)	1 (0.8%)	6 (2.6%)
その他	20 (20.2%)	28 (21.1%)	48 (20.7%)
合計	99 (100%)	133 (100%)	232 (100%)

表 1 日英語の Amazon レビューで使用された比喩の起点領域の頻度

日英共通で高頻度であった、＜力動性＞と＜旅＞の比喩の例を以下に示す。(2) (3) は＜力動性＞の比喩の例である。(2) は作品の魅力に惹かれる経験が物理的な引力の経験としてフレーミングされている。(3) は作品の内容が擬物化され、作者の制作過程は物体の力動的変化の過程として捉えられている。＜力動性＞の比喩は多様性に富んだカテゴリーで、少なくとも引力（「グイグイ惹きつけられる」‘*magnetism of the book*’）、捕捉（「抜け出せずに読んでしまい’ ‘*grabbed by the first section*’）、破壊（「想像力の限界をぶちやぶり」）、操作（‘*tidy the story up*’）、解放（「物語のくびきを逃れて」）、形成（‘*the characters were beautifully crafted*’）などの力動性に関わるものがみられた。

- (2) （読了できるか否かの）不安は何処（いずこ）へ…即座に引き込まれる
 (☆5「ラテン文学の傑作の文庫化」参考になった:24, 2024 年 8 月 15 日)
- (3) a collage of ideas *slung together* so randomly it seems clear, like the characters in this book, they were never meant to *come together in one place*
 (☆2 ‘*miasmic/psycho-tropic/shambolic*’, Helpful: 4, 4th May 2016)

(4)(5) は<旅>の比喩の例である。いずれも話の展開を移動としてフレーミングするものである。特に日本語では「円を描くように」「螺旋のように」という円形軌道の比喩が複数みられた。英語では、物語の世界が理解しにくいことを ‘difficult to get into at first’ のように、入り込みにくさとして表現する例が複数みられた。旅の比喩については 4.1 節でも検討する。

- (4) いやー、まともに読めたものではない。これはななめ読みにするしかない。私も実際そうした。起承転結が意図的に崩され、話がどんどん違う方向に進む。(☆5「マコンドは、マチュピチュかマヤ文明都市か」参考になった：29, 2024 年 7 月 6 日)
- (5) The ending of the book (which I shan’t spoil) does go a long way to explaining why this is. (☆3 ‘Beautifully written, but quite frustrating’, Helpful: 3, 5th December 2011)

起点領域によって、目標領域のどの要素をフレーミングするかには偏りがみられた。表 2、表 3 は日英語それぞれにおける起点領域と目標領域の対応の傾向を示す。体験、内容、メタ情報、価値の順に頻度が高い点は日英語に共通していた。他の共通点としては、第 1 に、体験が最も比喩のターゲットになりやすく、その多くが<力動性>、<旅>を起点とした比喩である傾向、第 2 に、<文学>でメタ情報をフレーミングする傾向がみられた。

	内容	体験	価値	メタ情報	合計
力動性	4	16	2	-	22
旅	4	17	1	-	22
文学	-	-	-	5	5
視覚	-	3	1	-	4
織物	1	-	-	-	1
魔法	3	5	3	-	11
水	3	1	1	-	5
容器	2	-	-	-	2
聴覚	-	1	1	-	2
音楽	-	-	-	5	5
その他	6	8	3	3	20
合計	23	51	12	13	99

表 2 日本語における起点領域ごとの目標領域の要素の頻度

	内容	体験	価値	メタ情報	合計
力動性	12	13	3	-	28
旅	-	17	-	-	17
文学	1	1	-	11	13
視覚	6	6	2	-	14
織物	14	-	-	-	14
魔法	-	2	1	-	3
水	1	4	2	-	7
容器	2	-	2	-	4
聴覚	-	4	-	-	4
音楽	-	-	-	1	1
その他	10	10	2	6	28
合計	46	57	12	18	133

表 3 英語における起点領域ごとの目標領域の要素の頻度

4. 考察

本調査の結果は、同じ文学作品に対する日英語のレビューに、同程度の頻度で、類似した起点領域の比喩が用いられている傾向があることを示している。特に、起点領域のなかで頻度上位を占める＜力動性＞と＜旅＞、目標領域のなかでフレーミング対象となる頻度順位が体験、内容、メタ情報、価値の順になることが共通であることは、文学作品に対するレビューにおける普遍的なフレーミング方略の存在を示唆している。一方で、日本語のみ、英語のみに観察された傾向もみられた。また、概念的な分類としては同じでも、実際のフレーミング効果に文化的な知識が強く関与している例もみられた。以下では、普遍性と文化固有性という観点から、フレーミング方略のより詳細な特性を検討する。

4.1. 普遍的フレーミング

日英語を通じて最も頻度が高い起点領域は＜力動性＞であったが、3 節で述べたように、引力、捕捉、破壊、操作など、異なるフレーミングの効果につながると思われる概念的な多様性がみられた。したがって、本調査においては、日英語の両方で高頻度であり、フレーミング効果という点で等質性が最も高い起点領域は＜旅＞である。「物語の入り口」「読み進む」「結末にたどり着く」など、＜読書は旅＞という概念メタファーは定着した捉え方である。本調査でみられた旅の比喩には慣習的なものも多かったが、これらの慣習的比喩を拡張した比喩も多くみられた。

興味深いのは、旅の比喩が負の評価を表出するために使用される傾向である。旅の比喩が、肯定的・否定的評価のいずれを喚起するか、または評価を喚起しないかをみると、日本語の旅の比喩 22 件のうち、肯定的評価を喚起する例が 13.6%、評価を喚起しない例が 36.3%、否定的評価を喚起する例が 50.0%であった。英語では、17 件のうち、肯定的評価を喚起する

例が 35.3%、評価を喚起しない例が 17.6%、否定的評価を喚起する例が 47.1%であった。

否定的評価を喚起する例としては、物語に入り込みにくい、一方向に進行しない、読書が進まない、といった読書体験の困難を移動の困難として捉える (4)(6) のような事例や、物語の進行が起伏に富んだものではなく、くり返しのように感じられる箇所があることを、旅の単調さやあてどなさとして捉える (7)(8) のような事例がある。

- (6) 働きながらだと本当に本格小説は読み進めない。年もあるんだけど
(☆5「なかなか、前に進まない」参考になった：14, 2024 年 7 月 16 日)
- (7) It meandered through lots of anecdotes and time-progression, but without any real sense of plot. (☆2 'More effort than enjoyment in reading this book', Helpful: 14, 5th August 2020)
- (8) Following on from this there is no great tragedy, setback, and victory, and in this, there is no *rise and fall*.
(☆5 'Magical realism is an acquired taste', Helpful: 9, 28th December, 2019)

レビューで使われる比喻が否定的評価と結びつきやすい傾向は、先行研究でも論じられている。Fuoli, Littlemore, and Turner (2021) は映画のレビューの評価表現を調査し、比喻を使った評価表現は、比喻でない評価表現よりも評価極性が否定に傾きやすいことを明らかにした。本調査の結果は、特定の起点領域を用いた比喻のフレーミングが、否定的評価を表出する上で使用されていることを示したという点で、先行研究で指摘されてきた比喻と否定的評価を関係づける、具体的なフレーミング方略の一端を明らかにしたと言える。

4.2. 日本語特有のフレーミング

表 1 が示すように、魔法を起点領域としたフレーミングは、相対的に日本語に多くみられた。(9) の「魔法をかけられたかのように」は作者の特殊な文体を鑑賞する経験の非現実性を強調し、タイトルの「魔法の良書」というまとめ方はその文学的価値を神秘的なものとして捉えていると言える。

- (9) 著者の文体の魅力として、ガルシア＝マルケスの文体は、まるで魔法をかけられたかのように美しく、以下の 3 つの理由で読む人を惹きつけられていると感じました。(☆5「世界を新しい目で見える力を与えてくれる魔法の本」参考になった：17, 2024 年 8 月 17 日)

この魔法によるフレーミングは、この文学作品の特殊性を強調し、鑑賞や評価をする上で通常の因果関係や論理の基準が通用しないことを含意するものであるが、いわゆるマジックリアリズムと言われる表現技巧のパラダイムを背景としたものだと考えられる。ガルシア＝マルケスはマジックリアリズムの旗手として知られているが、この文学史上の位置づけは、訳者である鼓直の「訳者あとがき」と筒井康隆による「解説」で強調されている。日本語版のレビューにおける魔法の比喻の頻出は、このあとがきと解説の内容と無関係ではないように思われる。作家や批評家による文学批評は一般読者にとっては権威的な存在であり、レビューにおける比喻の選択に一定の影響を及ぼしていることが示唆される。

4.3. 英語特有のフレーミング

表3を表2と比較すると、作品の内容を織物に喩える比喩は英語においてのみ高頻度で見られることが分かる。(10)はテキストのプロットを喩える‘weave’(織り方)の比喩から始まり、＜テキストは織物＞という概念メタファーを展開した比喩が連続して用いられている。ウィルトン・カーペット (Wilton carpet) など、イギリス文化を背景とした具体的な織物のイメージも使われており、これらの比喩によって鮮明なイメージャリーが導入されている。

- (10) Unsurprisingly the plot is baffling. Its *weave* is not unlike that of a *Wilton carpet*, so instead of ‘*U*’ shaped yarns, the *fibre* is woven all the way through the carpet and then *sheared* to create a range of *cut and loop textures*.
(☆5 ‘One of the richest, most dense, detailed, dreamlike, symbolic, mysterious, magical, funny...’, Helpful: 29, 1st September 2023)

＜テキストは織物＞という概念メタファーは、「物語を紡ぐ」など日本語の慣習的表現のなかにもある程度はみられるが、英語では *weave* (織る)、*interweave* (織り合わせる)、*knit* (編む)、*thread* (糸を通す) といった表現はテキストの比喩的描写によく用いられるが、その理由の1つは *text* (テキスト) と *textile* (織物) の語形の類似性 (ないしは語源的な関連性) であると考えられる。このような語形・語源の関連性は日本語にはなく、このことが＜テキストは織物＞という比喩の日英の頻度差に反映されたものと推測できる。

4.4. 文化依存的フレーミング

表2と表3は、文学や音楽を比喩の起点領域として持ち出すことで評価対象の文学作品をメタ的にフレーミングする例が、両言語にみられることを示している。これは方略としては同じであるが、このタイプのフレーミングには、文化固有の知識が大きな役割を果たす。(11)は日本の漫画家つげ義春のシュールな作風がガルシア＝マルケスの文体を評価する上で引き合いに出されている。(12)では、テキストをランダムに切り合わせて新しいテキストを作るカットアップの手法で知られるアメリカの小説家ウィリアム・バロウズ (William Burroughs) と、バロウズの手法を歌詞に応用したイギリスのアーティストデヴィッド・ボウイ (David Bowie) が言及されているが、これらの人物についての文化的知識がなければフレーミングは成立しない。

- (11) ちなみに変な話、つげ義春の「ねじ式」を想起したのはやっぱり自分だけだろうなあ・・・
(☆4「ブンガクの境界とは」参考になった：24, 2024年9月9日)
- (12) The reader might be forgiven in thinking that s/he had one foot in a *William Burroughs cut-and-paste text* and the other in a *David Bowie lyric*.
(☆5 ‘One of the richest, most dense, detailed, dreamlike, symbolic, mysterious, magical, funny...’, Helpful: 29, 1st September 2023)

5. おわりに

異文化を背景とした翻訳小説を読むという、言い表すのが容易ではない経験を表現する上で、比喩はその経験をフレーミングし、特定の側面を際立たせる機能を担っている。＜力動

性>や<旅>といった物理的な行為や移動にもとづく身体性の高い比喩は、日本語、英語を問わず広く使用されていた。特に否定的評価を喚起する<旅>のフレーミングが共通して高頻度であったことは、普遍的なフレーミング方略の存在を示唆する。日本語で好まれる<魔法>の比喩、英語で好まれる<織物>の比喩には、言語的、文化的な動機づけがみられる。言語間の比較を行い、言語文化の背景を分析することで、普遍的なフレーミング方略の特徴が浮かび上がってくると考えられる。

人はウェブ上の評価情報につねにさらされている。ショッピングでの商品購入、レストランやホテルの予約、小説・映画・音楽などのエンターテインメントの選択にさえ、オンラインの「クチコミ」の評価はつきまとい、消費者の態度や意志決定を左右している。この評価情報は言語を介しているが、その言語特性の一端を本調査によって明らかにした。本調査では比喩の目標領域を、あるメタ情報をもった作品の内容を体験し価値を評価するという鑑賞の概念構造として整理したが、この概念構造を目標領域とする比喩が使われると思われる商品カテゴリーは、文学作品以外にも、映画、音楽などが考えられる。これらのカテゴリーの横断的調査を行うことで、主観性の高いレビューにおける比喩的フレーミング方略の一般的特性が解明されることが期待される。

謝 辞

本研究は国立国語研究所基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」サブプロジェクト「アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学」によるものである。本研究は JSPS 科研費 JP24K03841 の助成を受けている。

文 献

- Boeynaems, A., Burgers, C., Konijn E. A., & Steen, G. J. (2017). The effects of metaphorical framing on political persuasion: A systematic literature review. *Metaphor and Symbol*, 32 (2), 118–134.
- Burgers, C., Konijn, E. A., & Steen, G. J. (2016). Figurative framing: Shaping public discourse through metaphor, hyperbole, and irony. *Communication Theory*, 26 (4), 410–430.
- Fuoli, M., Littlemore, J., & Turner, S. (2021). Sunken ships and screaming banshees: Metaphor and evaluation in film reviews. *English Language & Linguistics*, 26 (1), 75–103.
- Hendricks, R. K., Demjén, Z., Semino, E., & Boroditsky, L. (2018). Emotional implications of metaphor: Consequences of metaphor framing for mindset about cancer. *Metaphor and Symbol*, 33 (4), 267–279.
- Komatsubara, T. (2023). Framing risk metaphorically: Changes in metaphors of COVID-19 over time in Japanese. In A. Ädel & J. Östman (Eds.), *Risk discourse and responsibility* (pp. 63–85). John Benjamins.
- . (2024). Framing and metaphor in media discourse: Multi-layered metaphorical framings of the COVID-19 pandemic in newspaper articles. In C. Shei & J. Schnell (Eds.), *The Routledge handbook of language and mind engineering* (pp. 274–292). Routledge.
- Pragglejaz Group. (2007). MIP: A method for identifying metaphorically used words in discourse. *Metaphor and Symbol*, 22 (1), 1–39.
- Semino, E., Demjén, Z., & Demmen, J. (2018). An integrated approach to metaphor and framing in

cognition, discourse, and practice, with an application to metaphors for cancer. *Applied Linguistics*, 39 (5), 625–645.

サハリンと北海道のアイヌ語地名に残る「川」の古形

落合 いずみ（帯広畜産大学）[†]

An archaic form of “river” retained in Ainu place names in Sakhalin and Hokkaido

Izumi OCHIAI (Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine)

要旨

近代アイヌ語における「川」は *pet* というが、落合（2024）はアイヌ語借用地名において「川」に相当する漢字表記（音読の「別（ベツ）」、訓読の「淵（フチ）」など）を通時的に検討した上で、アイヌ祖語の「川」に語末母音 *i* を再建し、祖形を **peti* ([*peti*, *beti*]) > [*peci*, *beci*] とした。そして借用当時「別」はベツ（漢音）ではなくベチ（呉音）と読まれたと推察した。本稿はこの推察を裏付けるデータを提示する。樺太アイヌの山辺安之助がアイヌ語で口述し、言語学者の金田一京助が日本語対訳を付した『あいぬ物語』（初出は 1913 年）の中には弥満別（サハリン）、筑別（北海道）など、サハリンと北海道の地名が散見される。これら地名に相当するアイヌ語本来地名は片仮名表記でヤマベチ、チクペチと振られており、これらアイヌ語本来地名において「川」の古形 *peci* が保たれている。古代日本語がアイヌ語地名を借用した当初においてアイヌ語の「川」は語末母音を持つ **peti* であって、漢字表記「別」は呉音のベチを示した可能性が高い。（未発表）

1. はじめに¹

アイヌ語による地名は日本列島に散在し、その密度は東北、北海道で濃い。本稿ではアイヌ語による本来の地名をアイヌ語本来地名と呼ぶ。これらアイヌ語本来地名を採用した日本人は、これら地名を日本語の音素目録や音節構造に合わせて多少変化させた。これらを本稿ではアイヌ語借用地名と呼ぶことにする。また、アイヌ語借用地名の多くには漢字表記が宛てられ、音読または訓読によって発音される。

本稿は『あいぬ物語』に記録されたアイヌ語地名を扱う。『あいぬ物語』（山辺・金田一 2021 [1913]）はアイヌ語樺太方言母語話者の山辺安之助とアイヌ語研究者の金田一京助による共著書である。山辺安之助がアイヌ語樺太方言で自叙伝を語り、その語りを金田一京助が筆録した。アイヌ語と日本語訳が併記されているが、日本語訳が本文として記され、山辺安之助が語ったアイヌ語は日本語訳の脇にルビとして記されている。このルビに記されたアイヌ語は片仮名表記が用いられている。

山辺安之助の語りの中にはサハリンと北海道におけるアイヌ語地名が散見される。これら

[†] i.ochiai@obihiro.ac.jp

¹ 知里（1973 [1942] : 460–461）によるとアイヌ語樺太方言の音素目録は母音 /a e i o u/、子音 /p t k c[te] s r m n w y x h/ である。

アイヌ語地名の中、「川」を表す語が含まれるものを考察対象とする。アイヌ語において「川」を表す語は *pet* と *nay* の二つがあるが、本稿は *pet* に焦点を当てる。アイヌ語地名において、*pet* を持つものは多い。特にこの *pet* は地名の末尾に現れ、対象となる川を修飾する要素がその前に置かれる。例えば日本語に借用されたアイヌ語地名である「登別」はアイヌ語本来の地名において *nupurpet* (アイヌ語地名解は *nupur pet*、注釈は「色の濃い・川」という(山田 1983b: 275–277))。以下アイヌ語地名解を示す場合はアイヌ語の形態素をスペースで区切り、それぞれの形態素に対する注釈は「・」で区切ることにする。

落合 (2024) は近代アイヌ語の *pet* 「川」がアイヌ祖語 **peti* に遡ると議論した。多くのアイヌ語本来地名において **peti* は *pet* に変化したが、祖形 **peti* の語末母音 *i* を保存した川 of 古形 *peci* (**peti* の *t* が口蓋化した形式) を持つアイヌ語地名が少数ながら残存する。それらが *moypeci*、*tokapci*、*sorapci* である²。これらに加え、アイヌ語借用地名における漢字表記を考察した結果、*pet* の古形は語末に *i* を持っていた可能性が高いと推察した。

本稿は落合 (2024) の議論を補強するのが目的である。アイヌ語本来地名において「川」の古形 *peci* を残存するものとして、さらに五つが『あいぬ物語』の中のサハリン・北海道の地名に見つかった。本稿はそれらを報告する。その中の四つはアイヌ語借用地名において川に相当する部分に漢字表記「別」が用いられている。この漢字は現在では漢音のベツで読まれているが、古くは呉音のベチで読まれていたことを傍証するものである。

『あいぬ物語』におけるこれらのアイヌ語地名の紹介の前に、次節ではまず先行研究 (落合 2024) におけるアイヌ祖語 **peti* 「川」の再建についての議論を概観する。

2. アイヌ語祖語における「川」の再建

落合 (2024) は、アイヌ語において川を表す語を含むアイヌ語借用地名の漢字表記とその発音を検討し、アイヌ祖語において川を表す語を **peti* と再建した。近代アイヌ語における当該語は語末母音の *i* が脱落した形式である *pet* に変化している³。アイヌ語借用地名においてアイヌ語の川を表す漢字表記ではそれらの発音上、音読と訓読とに分かれる。音読するものは漢字一文字と二文字に分かれる。

音読するものの中、漢字一字を用いるのは「別」「瞥」「鼈」の三つであり、呉音における発音に拠るとそれぞれベチ、ヘチ、ヘチである。日本語においてハ行子音は *p* に遡ることを鑑み、さらにタ行子音の口蓋化子音が非口蓋化子音に遡ることも鑑みれば、それぞれ推定音価は *beti*、*peti*、*peti* である (これら推定音価は直立体で示した)。

音読するものの中、漢字二字を用いるのは「辺地」「米地」「比遅」の三つであり、呉音における発音に拠るとそれぞれヘチ、ベチ、ヒヂである。上述のようにこれらの早期の発音を再建するならそれぞれ *peti*、*beti*、*pidi* となる。

訓読する漢字表記は「淵」と「土」であり上述のように再建すればそれぞれ *puti* と *pidi* である。以上をまとめたのが表 1 である。これは落合 (2024: 45) の表を再編し、アイヌ語借

² 田村 (1996: 398) に挙げられた地名である *moypeci* には対応するアイヌ語借用地名は見られない。それ以外の *tokapci* と *sorapci* はアイヌ語借用地名である十勝と空知に対応する。

³ 脱落した語末母音 *i* は、共時的に見ると具体形接尾辞として再利用されるため「川」の具体形は *pec-i* となる。アイヌ語の歴史において語末の狭母音が脱落し、その脱落狭母音が具体形接尾辞として再利用されることについては落合 (2025) を参照されたい。

用地名における川の漢字表記を上代日本語における推定音価に基づいて分類したものである。漢字表記の横に片仮名表記を、その横にカタカナ表記の上代日本語における推定音価を示した。「---」と示された箇所は当該形式が得られなかったことを示す。

音読（一文字）	音読（二文字）	訓読	推定音価による分類
別 ベチ beti	米地 ベチ beti	---	beti
瞥／鼈 ヘチ peti	辺地 ヘチ peti	---	peti
---	比遅 ヒヂ pidi	土 ヒヂ pidi	pidi
---	---	淵 フチ puti	puti

表 1 アイヌ語借用地名において「川」を表す漢字表記の推定音価による分類

日本語推定音価として beti、peti、pidi、puti の四つの型が見られる。この中、前半の二つ beti、peti はアイヌ祖語*peti を忠実に反映させた借用形と言える。なぜならアイヌ語において子音の有声と無声は弁別的ではないため[peti]とも[beti]とも発音された可能性があり、これらを日本語話者は[p]か[b]かで聴き取って漢字表記を宛てたのだろう。

三つ目の pidi について言えば、アイヌ祖語*peti の第一音節の母音が e ではなく i で借用されている。当該地名である「比遅波」と「土齒」は肥前風土記（8 世紀に成立）に採録されたもので、現長崎県に位置する。これについてヴォヴィン（2008：31-33）は上代肥前国の日本語変種において *e > i の変化が起きたためと推定している。

四つ目の「淵」puti に関して言えば、これらでは第一音節の母音が e ではない。アイヌ語の語形を反映させるのであれば peti や pedi といった語根が最適だが、このような語根が日本語固有語において見当たらなかったため、近似の発音を持つ語 puti を利用したということだろう。しかも、この漢字「淵」の意味が、アイヌ語で「川」を表す語としてこの漢字を選定したことと関係している可能性もある。どちらも水と関わる語であるためその意味的共通点が意識されたのかもしれない。

以上はアイヌ語借用地名における川に相当する漢字表記についてであるが、これに対応するアイヌ語本来地名について考えてみると、北海道に moypeci がある。この地名の後半 peci はアイヌ祖語の*peti において語中の t が子音 i の前で口蓋化を示した形式であると落合（2024：47-48）は考える。さらに落合（2024）は北海道におけるアイヌ語借用地名の「十勝（トカチ）」「空知（ソラチ）」に対応するアイヌ語本来地名の早期の形式を to ka peci（沼・ほとり・川）、so o rap peci（滝・そこに・たくさん落ちる・川）と解釈し、川の古形 peci の第一母音 e が脱落し、アイヌ語本来地名 tokapci と sorapci になったと考えた。

近代アイヌ語の「川」は pet であり、子音終わりの語になっている。しかし上述のアイヌ語借用地名とアイヌ語本来地名は、アイヌ語の「川」が語末母音 i を持っていたことを示しているため、アイヌ祖語に*peti が再建された。

本稿では「川」を指すものとしてアイヌ語借用地名に用いられる漢字表記の「別」と「淵」に注目する。特に「別」について、落合（2024）では、現在一般的な漢音に拠る発音「ベツ」ではなく、漢音が日本に導入されるよりも早くに、日本に普及していた呉音による発音「ベチ」を採っている。現在、東北・北海道に見られるアイヌ語借用地名の中で、川を表す漢字表記「別」を持つものはもれなく「ベツ」と発音されるだろう。例えば、登別はノボリベツである。アイヌ語借用地名においてこの漢字が古くは呉音で読まれていただろうことは、表 1 における音読（二文字）の例と訓読の例において語末が i であることから推定される。

3 節では「別」の呉音読みを支持する更なるデータ、つまり川の古形 *peci* の語末母音 *i* が残存するデータを、『あいぬ物語』におけるサハリンと北海道のアイヌ語本来地名の中に四つ見つけたことを紹介する。

3. 『あいぬ物語』におけるアイヌ語借用地名に「別」を含むものについての考察

3.1 節では『あいぬ物語』の中に見つけた「川」の古形 *peci* を残存する四つのアイヌ語本来地名を挙げる。それらの地名には交替形も見られ、これらにおいて古形 *peci* の語末母音が脱落して *pet* で現れることを述べる。3.2 節では「川」の古形 *peci* を残存する形式を持つ地名について、それぞれの地名解を紹介する。3.3 節では地名解と先行研究との比較をもとに、『あいぬ物語』に見られる地名「オマベチ」と「ヤマベチ」の早期の地名を推定する。

3.1. 「川」の古形 *peci* を残存する四つのアイヌ語本来地名

『あいぬ物語』においてアイヌ語サハリン方言が片仮名表記されていることを 1 節で述べた。この片仮名表記されたアイヌ語サハリン方言には地名も含まれる。本稿はこれらカナカナ表記された地名をアイヌ語本来地名と見なす。その中にサハリンにおける「オマベチ」、「コチヨベチ」、「ヤマベチ」と、北海道における「チクペチ」という地名が見られる⁴。これらは語尾に「ベチ」または「ペチ」を持つことから、この部分がアイヌ語の「川」の古形 *peci* (< **peti*) に相当すると見なせる。

ただしこれら四つの地名の中、オマベチとコチヨベチの二つには『あいぬ物語』において交替形も見られる。オマベチはオマベツ (山辺・金田一 2021 [1913]: 8) と表記され、コチヨベチはコチヨベツ (山辺・金田一 2021 [1913]: 3, 6) またはコチヨペツ (山辺・金田一 2021 [1913]: 4, 53) と表記される。これら交替形における語尾はベツまたはペツである。残りの二つのヤマベチとチクペチについては『あいぬ物語』以外の文献に交替形が見られる。ヤマベチについては、佐々木 (1969: 186, 188) がヤマンベツまたはヤワンベツと記してい

⁴『あいぬ物語』ではこの他に北海道における地名としてエペチ (山辺・金田一 2021 [1913]: 42) が挙げられていた。これはアイヌ語借用地名としての江別 (札幌市近隣) に相当するが、本稿ではこの地名における語尾のペチとそれに対応する漢字表記の「別」はアイヌ語において川を表す語とは異なるものと見なして考察の対象から外した。永田 (1984 [1891]: 59) によると江別のアイヌ語本来地名は *yupe ot* であり、地名の意味は「鮫居ル川」であると述べる (ただし永田 (1984 [1891]: 59) では *yube ot* と表記されているのを本稿では *b* を *p* に変更した)。萱野 (1996: 454) によると *yupe* は「チョウザメ」、知里 (1956: 223) によると *ot* は「群在する」を意味するため、このアイヌ語本来地名の中に川を表す語は含まれていない。ちなみに永田 (1984 [1891]: 87) は滝川市に見られる「江部乙 (エベオツ)」という地名も同様に *yupe ot* と解釈している。『あいぬ物語』のエペチは、*yupe ot* の中の動詞 *ot* に接尾辞 *-i* が付いて *yupeoci* (< *yupe ot -i*) になったものが由来ではないか。この接尾辞 *-i* は知里 (1956: 262) において「動詞について所・者・物・事の意を表す」される名詞化辞である。例えば、動詞 *ot* に名詞化接尾辞 *-i* が付いたアイヌ語地名として余市が挙げられる。知里 (1956: 116) によると地名解は *i-ot-i* (> *iyoci*)、注釈は「それ・群生する・所」(「それは蛇を指す」) である。

る。チクペチについては、山田（1983a : 85）がチクベツと記している。これら交替形では「ベチ」または「ペチ」の語尾が「ベツ」または「ペツ」に変わっている（本段落の太字箇所は本稿筆者による強調）。

これら交替形における語尾のベツ・ペツは想定上のアイヌ語の形態素/petu/ ([petu]~[betu])を表した片仮名表記ではない。なぜなら近代アイヌ語において「川」は *pet* であり、*petu* ではないからである。そのため片仮名表記ベツまたはペツは *pet* を表したものと見なす。片仮名表記において語尾にベチ・ペチを持つものが川の古形 *peci* を表すものであり、語尾にベツ・ペツを持つものが古形 *peci* から語末母音脱落によって生じた交替形の *pet* を表すものである。

表 2 ではこれら地名の片仮名表記を古形（左列）と語末 *i* が脱落した交替形（中央列）に分けてまとめた。古形の列の片仮名表記は全て『あいぬ物語』から引用である。交替形の列の片仮名表記について、『あいぬ物語』以外からの引用には影を付けて示した。また、先行研究において片仮名表記されたアイヌ語本来地名について、それらの片仮名表記をもとに推定されるローマ字を本稿筆者が付け加えた。

さらに、片仮名表記のアイヌ語樺太方言に併記された日本語注釈において、これらの地名に付された漢字表記に拠るアイヌ語借用地名との対応を右列に示した。『あいぬ物語』における漢字表記に拠るアイヌ語借用地名には複数の表記がみられることがあるが、それら異なる表記も示した。ただし「耶灣別」に限り『あいぬ物語』からではなく、葛西・西鶴・菱沼（1982 : 199）からの引用である。

アイヌ語本来地名（古形） ⁵	アイヌ語本来地名（交替形）	アイヌ語借用地名
オマベチ <i>omapeci</i>	オマベツ <i>omapet</i>	小満別、大満別
コチヨベチ <i>kociopeci</i>	コチヨベツ／コチヨペツ <i>kociopet</i>	胡蝶別
ヤマベチ <i>yamapeci</i> ⁶	ヤマンベツ <i>yamanpet</i>	弥満別、野満別
	ヤワンベツ <i>yawanpet</i>	耶灣別
チクペチ <i>cikpeci</i>	チクベツ <i>cikpet</i>	筑別

表 2 アイヌ語本来地名において「川」の古形 *peci* を残存するサハリン・北海道の地名とその交替形

3.2. 「川」の古形 *peci* を残存する四つのアイヌ語本来地名の地名解

ここではアイヌ語本来地名の地名解を紹介する。この地名解は、アイヌ語の形態素の組み合わせによって、アイヌ語本来地名を説明したものである。地名解それ自体、つまり形態素の組み合わせ自体がアイヌ語本来地名と同一の形式になるわけではない。地名解が地名へと定着する過程において、音形が多少変化する場合が多いからである。このことを踏まえな

⁵ これら形式の『あいぬ物語』からの引用箇所を記す。オマベチが山辺・金田一（2021 [1913] : 12）、コチヨベチが山辺・金田一（2021 [1913] : 12）、ヤマベチが山辺・金田一（2021 [1913] : 1, 8, 12, 63）、チクペチが山辺・金田一（2021 [1913] : 54）である。

⁶ 山辺安之助は山辺・金田一（2021 [1913] : 1）において「…私も亦、此の弥満別の産です。それで今に山辺の姓を名乗っている」と自らの姓が集落名に由来することを述べている。

がら以上の四つの古形 *peci* を持つ地名について、それらの地名解を先行研究から見てみる。

オマベチの地名解は佐々木（1969：142）に挙げられている。それによると *o ma un peci* という構成であり、その注釈は「尻に・澗（入り江）・ある・川」である⁷。

コチヨペチの地名解は見つけられないが、交替形のコチヨベツは佐々木（1969：124）に挙げられている。それによると *koci ooho pet* という構成であり、その注釈は「その凹地・深い・川」である⁸。

ヤマベチの地名解は見つけられないが、交替形のヤワンベツは佐々木（1969：186）に挙げられている。それによるとこの由来は *ya wa un pet* であり、その注釈は「陸・の方に・いる・川」である⁹。

チクペチの地名解は見つけられないが、交替形のチクベツは永田（1984 [1891]：446）に挙げられている。それによると地名解は *cuk pet* ということであり、注釈は「秋・川」である。

3.3. 地名解から見る『あいぬ物語』中の地名 *omapeci* と *yamapeci* に起きた変化

表2にあるように、『あいぬ物語』に見られる地名「オマベチ」に相当する佐々木（1969：142）における地名は「オマベチ」ではなく「ヲマンベツ」となっている（脚注7も参照されたい）。ヲマンベツには語中に「ン」を含むが、これは佐々木（1969：142）における地名解 *o ma un peci* の中にある子音 *n* を表したものだだろう。片仮名表記のヲマンベツをローマ字表記に変換すると *omanpet* になると考える。

表2にあるように『あいぬ物語』におけるオマベチをローマ字表記に変換すると *omapeci* になる。これを山辺安之助が[*omanpeci~omanbeci*]というように両唇閉鎖音の前で *n* が発音されていた可能性があるのかどうか考えてみる。

山辺安之助の口述を筆録したのは岩手県出身の金田一京助である。このオマベチという片仮名表記には金田一京助の母語方言において有声阻害音系列は前鼻音化することが関わっている可能性もある。アイヌ語において鼻音と両唇閉鎖音から成る子音連続/*np*/を、バ行の

⁷ ただし佐々木（1969：142）ではこの地名をヲマンベツと片仮名表記しているため語尾のベツは交替形の *pet* を指しそうである。ところが地名解では *peci* と明記しているのである。そのためこれはアイヌ語地名 *omanpeci* を指すものと見なした（図1も参照されたい）。ちなみに佐々木（1969：142）の実際の表記では *peci* を *pet* と *i* に分解して、それぞれに「川」と「~のところ」という注釈を与えている。しかし落合（2024）の議論を踏まえるとこれは *peci* が語根であり、川を表す語の古形であるため、本文では分節せずに示した。

⁸ 佐々木（1969：124）では *koci* に「その凹地」と註釈を付しているが、これは *koc-i* と分解し語根 *kot* が凹地、接尾辞 *-i* は具体形を作るものと解釈しているためである。落合（2025）による、アイヌ語は語末狭母音 *i* と *u* が脱落する歴史的変化を経たが、脱落狭母音は具体形接尾辞として残存するという議論を踏まえれば、*koci* は語根そのものの可能性がある。

⁹ ちなみにヤワンベツと類似の地名が北海道にも見られる。山田（1983a：107）にはアイヌ語借用地名として止別（ヤンベツ）があり、アイヌ語における地名の由来は *ya wa an pet* であるとする（知里（1973 [1942]：158）にも同じ地点の同じ地名解が挙げられている）。注釈は「内地の方・に・ある・川」である。存在を表す動詞を *un* と採るか、*an* と採るかで二つは異なっている。

片仮名で表記することで、このバ行を前鼻音化した両唇閉鎖音と見なし、それによってアイヌ語の当該子音連続 *np* [*np~nb*] を表したかったのかもしれない。

同様のことは『あいぬ物語』に見られる地名「ヤマベチ」にも当てはまるはずである。これに相当する地名は佐々木 (1969 : 186, 188) において「ヤマンベツ」または「ヤワンベツ」と表記されており (表 2)、これらでは両唇閉鎖音の前に *n* を有する。

この中、ヤワンベツについては表 2 に示したように耶灣別という漢字表記が見られ、葛西・西鶴・菱沼 (1982 : 199) によるとこの漢字表記は 19 世紀の資料『北嶋志』(1854 年に成立) の記録に拠るとすることから、*yawanpeci* (> *yawanpet*) が古い形式であったと考えられる。この地名において *w* から *m* への突発的変化が起きたことになる。これはこの地名の意味「陸の方にある川」における「陸」の意味と、日本語における「山」の意味が引き付けられることによって、日本語における「山 (やま)」の発音が侵入し *yawanpeci* から *yamanpeci* に変化したためではないか¹⁰。

この「ヤマベチ」について、『あいぬ物語』の中には片仮名表記に相当するローマ字表記も記されており、*Yamabechi* として現れる。このローマ字表記は本書中において金田一京助が著した付録「樺太アイヌ語大要」(山辺・金田一 (2021 [1913] : (20))) に記されたものである。金田一京助によるローマ字表記においても両唇の前に *n* が現れていないということは、片仮名表記においても両唇閉鎖音に前鼻音が伴うと想定していたわけではなさそうである。ということは、山辺安之助の話す樺太アイヌ語において *yamapeci* というように、*n* が見られない発音であったと考えられる。

『あいぬ物語』において山辺安之が用いたアイヌ語本来地名 *omapeci* と *yamapeci* では *n* が見られない。しかし、これらに相当する地名解は *n* が現れるのに加えて、他の文献におけるアイヌ語本来地名の中に *n* が現れる。このことから、これらアイヌ語本来地名は早期において *n* を持っていたが、山辺安之助の話すアイヌ語樺太方言においては *n* が脱落したと考えられる¹¹。

これら二つの地名について、早期の形式 (*omanpeci* と ***yawanpeci*) から山辺安之助の用いる *n* の脱落した形式 (*omapeci* とその変化形 *omacet*、それから *yamapeci*) にいたるまでの変化を図 1 に示した。***yawanpeci* については、*n* の脱落を経ないが、*peci* の語末 *i* が脱落した交替形 (*yawanpet* と *yamanpet*) にいたるまでの変化も図 1 に示した。形式の中で **** を付したものは推定される形式ではあるが在証された形式ではないことを示す。山辺安之助が用いる形式には下線を付けて示した。

¹⁰ これに関連し、佐々木 (1969 : 186) では「ヤマンベツ」の地名解として *yama un pet* (山・の方にいる・川) と解釈し、*yama* を日本語の「山」であると見なしている。本文で述べたように、これは地名が付けられた当初から日本語の「山」を形態素として取り入れたものではなく、後に再解釈がなされたため日本語の *yama* が導入されたと考える。

¹¹ なぜこれらの地名において両唇閉鎖音の前の鼻音 *n* が脱落したかについては不明である。

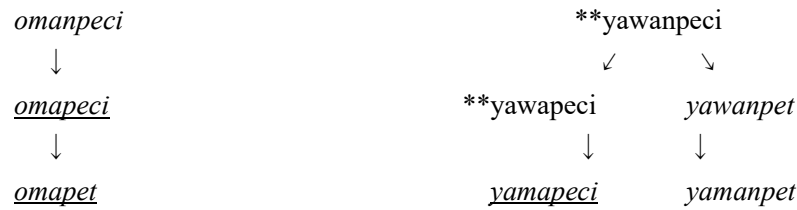


図1 推定される早期の地名 *omanpeci* と ***yawanpeci* からの変化

4. 『あいぬ物語』におけるアイヌ語借用地名に「淵」を含むものについての考察

表1で見たようにアイヌ語借用地名において漢字表記「淵」は、アイヌ語の「川」を表すものとして使われることがある。それに加えて、アイヌ語借用地名において漢字表記「淵」は川と川、川と海、川と湖などの合流点を指す「口」としても使われることがある。

この水に関する「口」を表す語は近代アイヌ語では *put* である。この具体形は山田（1982 : 233）によると *puc-i* / *put-i* / または *put-u* である。落合（2025）における歴史的語末狭母音脱落と脱落母音の具体形接尾辞としての再利用の議論に基づいて考えれば、アイヌ祖語には **puti* または **putu* が再建される¹²。

例えば、山田（1982 : 233）によると名寄川が天塩川本流（どちらも北海道に位置する）に注ぐ辺りを「内淵」という。地名解は *nay puci* であり注釈は「川・の口」となっている¹³。そのためアイヌ語借用地名において漢字表記「淵」が用いられた場合に、アイヌ語の川に対応するものか、それとも水と水との結合点としての口に対応するものかを検討する必要がある。

『あいぬ物語』に現れたアイヌ語借用地名において「淵」を持つものが四つみられた。それらは「遠淵」、「内淵」、「橋淵」、「目奈淵／皆淵」である¹⁴。4.1 節ではその中で「淵」が口を表すと考えられる地名として「遠淵」、「内淵」、「目奈淵／皆淵」の三つを挙げる。4.2 節では「淵」が川を表す可能性を残す地名として「橋淵」を挙げる。

表3の最左列には「淵」を持つアイヌ語借用地名の四つを挙げた。それぞれに相当する片仮名表記のアイヌ語本来地名を左から二番目の列に挙げた。右から二番目の列には「淵」が水に関する口を表す地名について、片仮名表記を基に本稿筆者が推定した音価をローマ字表記（斜体）で示した。片仮名表記の末尾がチの場合は *puci* に、ヅの場合は *putu* と解釈した。ツの場合はこれをヅと区別していたなら、川を表す「別」（ベツ）が *pet* とローマ字

¹² 祖形の語末が **i* であったか **u* であったかは不明である。

¹³ 山田（1982 : 233）が *puci* に対して「の口」と註釈を付けたことから、*puci* を *put-i* [*puci*] と分節して *put* が語根、*-i* が具体形接尾辞と解釈していることがわかる（脚注8も参照）。山田（1982 : 233）には *putu* も見られ、同様に *put-u* と分節して *-u* は具体形接尾辞と解釈していることがわかる。この *putu* はアイヌ語借用地名において「太」（例として挙げられているのが「名寄太」）という漢字表記が用いられることを示唆している。

¹⁴ それら地名の出典については、「遠淵」が山辺・金田一（2021 [1913] : 8, 12, 53）、「内淵」が山辺・金田一（2021 [1913] : 13, 22, 69）、「橋淵」が山辺・金田一（2021 [1913] : 4, 12）、「目奈淵」が山辺・金田一（2021 [1913] : 12）、「皆淵」が山辺・金田一（2021 [1913] : 21, 53, 98）である。

表記されるように、*putu* ではなくて *put* となるだろう。またはツのように *tu* と示したかったが半濁点をつけ忘れたのだとしたら、*putu* の可能性もある。そのため末尾がツの場合は *put(u)* と表記した（つまり *put* または *putu* のいずれか）。

アイヌ語借用地名	アイヌ語本来地名	口	川
遠淵	トープツ／トーブツ トウブチ	<i>toput(u)</i> <i>topuci</i>	
内淵	ナイプヅ ナイプチ／ナイブチ	<i>nayputu</i> <i>naypuci</i>	
目奈淵	メ ブチ ¹⁵	<i>menapuci</i>	
皆淵	ミナプチ／ミナブチ	<i>minapuci</i>	
橋淵	ハシプチ／ハシブチ		<i>haspeci</i>

表 3 アイヌ語借用地名に含まれる「淵」の分類

4.1. 「淵」が口を表す地名

まず遠淵であるが、この地名解は葛西・西鶴・菱沼（1982：129）において「トウは湖、ブチは湖沼、川などの口を云う。即ち湖口の義」とある。ここに述べられるようにアイヌ語で湖を指す語は *to* である。

次に内淵であるが、これは上述した北海道における地名の内淵と同一の漢字表記を持つため、同一構成の地名であると見なせる。地名解は *naypuci* であり注釈は「川・の口」であった。

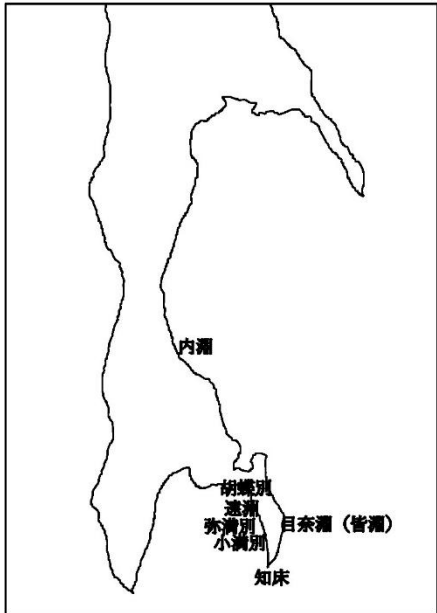


図 2 本稿に関わるサハリンの地名が記された地図

「目奈淵／皆淵」について、まずこの二つの漢字表記が同一地点を指す地名であることを述べる。山辺・金田一（2021 [1913]）に付された南樺太地図において「目奈淵（皆別）」と記されている。つまり目奈淵と皆別は同一地点を指す。図 2 は本稿筆者が山辺・金田一（2021 [1913]）に付された南樺太地図を基に作製し、本稿で扱う地名（ただしサハリンに限る）を記した地図である。

「皆別」という漢字表記の地名は『あいぬ物語』中の山辺安之助の語りには見られない。これは漢字表記「別」を用いていることから、古形 *peci* または語末母音が脱落した *pet* を語尾に持ち、川を指す地名のように見なせる。しかし、葛西・西鶴・菱沼（1982：189）において皆別（ミナベツ）は元々メナプツであり、池の口を表すと述べる。さらに「…皆

¹⁵ この片仮名表記は山辺・金田一（2021 [1913]：12）に挙げられた表記をそのまま転記したが、漢字表記から推してメナブチから「ナ」が脱落した誤植であると本稿では考えて *menapuci* とローマ字に変換した。

別湖に起因して付けられた地名であり…小川があつて沼に注ぎ、湖より一緒になって海に注ぐ處の意」とある。この説明によると「別」に相当する部分は本来 *put* であったということから、川ではなくて口の方の形式である。水に関する口を指すのであれば、漢字表記として「淵」が用いられる可能性が高い。そのため皆別は皆淵と同じ地点を表すと考えられ、そのため目奈淵と同じ地点でもある。

葛西・西鶴・菱沼 (1982 : 189) の記述から *menapuci* (または *menaput*) が *minapuci* (または *minaput*) に変わったことが分かる。何故第一音節における母音 *e* が *i* に変わったかは不明であるが、より古い地名は第一音節の母音が *e* である方であり、これを示す漢字表記が目奈淵であり、この母音が *i* に変わった表記が皆淵ということになる。ちなみに *mena* について山田 (1983b : 110–112) は小川、支流などと註釈が付され、川に関わる語であることは明らかだが正確な意味は不明であるとする。

「淵」が口を表す三つの地名について、「淵」の前に置かれてこれを修飾する部分はすべて水に関する語であった。遠淵の場合は湖を意味する *to*、内淵の場合は川を意味する *nay*、目奈淵／皆淵の場合も川に関わる語を意味する *mena* である。

4.2. 「淵」が川を表す可能性がある地名

橋淵という地名について考察する。この地名は佐々木 (1969) にも葛西・西鶴・菱沼 (1982) にも記述は見られない。早い時期に廃村になったと考えられるが、『あいぬ物語』(山辺・金田一 2021 [1913] : 12) には橋淵がサハリン南端に突き出た二つの岬の中、東側の岬の地名である知床の外側に位置していることが記されている¹⁶。

「淵」が口を意味するのであれば、4.1 節でみたようにその前の修飾部分が水に関する語である可能性が高い¹⁷。しかし「橋」の発音をアイヌ語で考えてみても水に関するとして当てはまるものが見当たらない。

¹⁶ さらに (山辺・金田一 2021 [1913] : 4) は「知床の酋長は、其の後に、久しく優れた人も出なかったから、聞えなくなってしまったけれど、去年南極探検隊へ犬を護送して、樺太から遙々シドニーへ赴いた土人、橋村弥八は、此知床の橋淵村から出た人で…橋村という名字はやはり、其橋淵という村の名から、取った姓です」と述べている。

¹⁷ ただし「口」を表す *putu* が、水に関連しない語に後続する地名例も見られる。例えば山田 (1983a : 202) に挙げられたアイヌ語本来地名 *makkari putu* (真狩川の・川口) がそうである。山田 (1983a : 202) によると真狩川のアイヌ語本来地名は *mak kari pet* (奥の方を・廻っている・川) であるが、この川の口であれば *mak kari pet putu* と言うべきところ *pet* を省いて *makkari putu* と表現すると説明している。この場合の *makkari* は *pet* 無しでも特定の川を指すと見なされている可能性もある。これは沙流川の例がまさにそうであり、山田 (1982 : 31) によると沙流川は古地図にサルベツ (*sar pet*) とあるがアイヌ民族の古老は単に *sar* (*sar* は葦原の意味) 呼ぶとあり、この川口は *sar pet putu* ではなくて *sar putu* (アイヌ語借用地名は沙瑠太) である。これらから、*putu* が水に関連しない語に後続する場合は水に関連する語が省かれている可能性が高いと考える。これに沿って考えれば、4.2 節で提案した「橋淵」のアイヌ語本来地名 *haspeci* は、*peci* 「川」の部分 *puci* 「口」である可能性も出てくる。その場合、*haspuci* という構成になり、これは *has pet(i) puci* から *pet(i)* が省かれて生じたという解釈も生じる。どちらの解釈がより妥当かについては当該地点の地理的情報が示唆を与えるだろう。

一方で「淵」が川を意味するのであれば、橋淵と音声的に類似したものとして、北海道における「鷺別」というアイヌ語借用地名が挙げられる。上原（1824：画像番号 DIGITAL-L0211521）によるとアイヌ語借用地名のワシベツとは、アイヌ語本来地名のハシベツであって、小柴の川という意味であると述べる。さらに「此川尻へ、崖に流木の寄る故地名になすといふ」とも述べる。つまりハシベツ（後のワシベツ）の地名解を *has pet*（柴・川）であると解釈している。これに関し、山田（1982：66）はアイヌ語で灌木、柴のことを *has* またはその交替形の *as* と言うと述べ、さらに山田（1983a：43）において北海道における「芦別」という地名は *as pet* に由来するだろうと述べている。

類似の例として北海道における「厚別」というアイヌ語借用地名も挙げられる。山田（1983a：24-25）は古い地図における片仮名表記アシウシベツなどを基に、アイヌ語地名解を *as us pet*（灌木・群生する・川）としている。ただし、ハシウシベツという片仮名表記も挙げられていることから *has us pet* とも言われたことが読み取れる。この地名解では動詞 *us* が含まれた部分である (*h*)*as us* 「灌木が群生する」が川を修飾している。上述の *has pet*（鷺別）や *as pet*（芦別）には動詞 *us* 「群生する」が含まれていないことから、この動詞が省かれることもあったのだろう。

以上から「灌木・柴が群生する川」を表すアイヌ語本来地名として *has us pet* または *as us pet*、さらにそれらから動詞 *us* が省かれた *has pet* または *as pet* という地名が見られることが分かった¹⁸。

当該地名の「橋淵」は、これの中の *has pet* において、川を表す語が古式の *peci* を示した地名、つまり *has peci* ではないだろうか。実際、橋淵と呼ばれていた辺りに灌木が生い茂っていた、または流木が流れ着くことがあったということが確かめられればその可能性は増すだろう。

5. おわりに

本稿は『あいぬ物語』に見られるアイヌ語借用地名において、川の古形 *peci* を示唆するものを五つ紹介した。それらのうち四地点—小満別（または大満別）胡蝶別、弥満別（または野満別）、筑別—は川を表す漢字表記として「別」の音読を用いていた。落合（2024）ではアイヌ語の川を表す漢字表記「別」は漢音のベツではなくて呉音のベチで読まれていたと推察したが、本稿ではこれらの四地点のアイヌ語本来地名によって、その推察を証拠付けるデータが現れた。さらに川の古形 *peci* を示唆する考えられる地名の中、残りの一地点である橋淵は川を表す漢字表記として「淵」の訓読を用いていた。まとめを表4に示す。左列は川を表すのに漢字表記「別」の呉音音読を用いるもの、右列は漢字表記「淵」の訓読を用いるものである。また『あいぬ物語』の片仮名表記によるアイヌ語本来地名と、それを基に本稿筆者がローマ字に変換したアイヌ語本来地名も記した。

¹⁸ 山田（1983a：81）は北海道における「箸別」というアイヌ語借用地名も *has pet* と解釈できると述べるが、一方で永田（1984 [1891]：431）は当該地名を *pas pet*（消炭・川）と解釈したことにも言及している。本稿は永田（1984 [1891]：431）の地名解がより古いアイヌ語本来地名を表していると考えて、(*h*)*as pet* の例から除外した。

別（音読・呉音） ¹⁹		淵（訓読）
小満別・大満別	オマベチ <i>omapeci</i>	橋淵 ハシブチ／ハシブチ <i>haspeci</i>
胡蝶別	コチヨベチ <i>kociopeci</i>	
弥満別・野満別	ヤマベチ <i>yamapeci</i>	
筑別	チクペチ <i>cikpeci</i>	

表 4 『あいぬ物語』に見られるアイヌ語借用地名に残る「川」の古形

文 献

- 知里真志保（1956）『地名アイヌ語小辞典—とくに地名研究者のために—』札幌：北海道出版企画センター。
- 知里真志保（1973 [1942]）「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」岡正雄（編）『知里真志保著作集第3巻』455–586. 東京：平凡社。
- 葛西猛千代・西鶴定嘉・菱沼右一（1982）『樺太の地名』東京：第一書房。
- 萱野茂（1996）『萱野茂のアイヌ語辞典』東京：三省堂。
- 永田方正（1984 [1891]）『北海道蝦夷語地名解（復刻版）』東京：吉川弘文館。
- 落合いずみ（2024）「アイヌ祖語における「川」の再建—アイヌ語地名「十勝」「空知」の由来とともに—」『言語記述論集』16：37–60.
- 落合いずみ（2025）「アイヌ語における具体形の形態的変遷」『言語記述論集』19：1–40.
- 佐々木弘太郎（1969）『樺太アイヌ語地名小辞典』札幌：みやま書房。
- 田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館。
- 上原熊次郎（1824）『蝦夷地地名考並里程記』[東京国立博物館デジタルライブラリー QA-601]
- ヴォヴィン、アレキサンダー（2008）『萬葉集と風土記に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布』京都：国際日本文化研究センター。
- 山田秀三（1982）『アイヌ語地名の研究1』東京：草風館。
- 山田秀三（1983a）『アイヌ語地名の研究2』東京：草風館。
- 山田秀三（1983b）『アイヌ語地名の研究3』東京：草風館。
- 山田秀三（1983c）『アイヌ語地名の研究4』東京：草風館。
- 山辺安之助・金田一京助（2021 [1913]）『あいぬ物語』東京：青土社。

¹⁹ ちなみに佐々木（1969：161）には礼文別と漢字表記され、レプンペチと片仮名表記される地名が挙げられている。この地名解は *rep un peci*（沖・にいる・川）となっていることからしても、アイヌ語の川の古形 *peci* を保った地名の一つに数えられると考える。この他に、山田（1983c）に附された地名索引から類例を探してみたところ、アイヌ語の川の古形 *peci* を保った地名と考えられるものとしてイタイベシ（山田 1983a：314（語尾はチが期待されるがここではシで現れている））、ウイヘチ（山田 1983a：86）、コエカタモコフチ（山田 1982：286）、サナブチ（山田 1983a：95）、シュンカタモコフチ（山田 1982：286）、ノヤヘチ（山田 1982：254）が見つかった。

名古屋・関西・佐賀方言における埋め込み疑問文の 解釈と音調体系

田中 真一（神戸大学）^{1†}

松井 理直（大阪保健医療大学）²

Syntax-Prosody Mapping of Embedded Interrogatives in Nagoya, Kansai and Saga Japanese

Shin'ichi TANAKA (Kobe University)¹

Michinao F. MATSUI (Osaka Health Science University)²

要旨

本研究は、異なる音調体系に属する名古屋・関西・佐賀方言を対照し、音調体系と埋め込み疑問文解釈との対応を分析する。上記 3 方言の話者に対し、条件(1)-(4)（(1)WH 要素のピッチ型、(2)主文述語 *fo* 抑制の有無、(3)文末音調、(4)WH 要素の意味構造）を統制した刺激文の知覚調査をもとに、主に以下を報告する。(a)方言に共通して(4)が疑問文解釈に反映されやすい。(b)名古屋方言・関西方言では共通して条件(2)が疑問文解釈に関与するのにに対し、佐賀方言（無アクセント方言）では、ほとんど関与しない。(c)YN 疑問文と WH 疑問文とで文末音調が異なる名古屋方言においては、他方言とは異なり(3)も解釈に影響を及し、世代差も見られる。(d)音調の自然性と疑問文解釈との間に一定の対応が見られ、その程度および関わり方は方言により異なる。

本発表は第 39 回日本音声学全国大会での発表「名古屋方言の埋め込み疑問文解釈における統語・意味情報と音調—世代差と方言音調体系に着目して—」および「埋め込み疑問文解釈の統語・意味情報と方言音調体系との対応関係—関西方言・佐賀市方言を中心に—」をもとに別の内容を加え、大幅に拡張したものである。

1. はじめに

1.1. 背景および先行研究

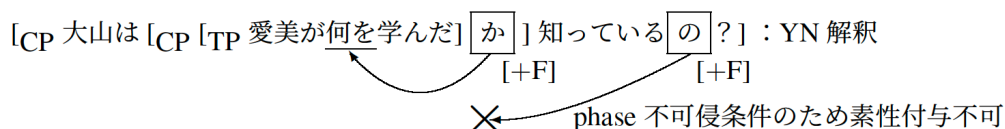
東京方言における統語情報と音調との対応関係については、Poser (1984)やPierrehumbert & Beckman (1988) などの先駆的研究を経て、現在も様々な観点から分析されている。本研究が対象とするWH埋め込み疑問文と音調との対応関係について、西垣内・日高 (2010)は、(1)のような埋め込み疑問文が、(1a)の真偽疑問文 (YNQ) としても(1b)の疑問詞疑問文 (WHQ) としても解釈され得ること、また、両者が音調の違いとして実現することを指摘している。

- (1) 大山は愛美が何を学んだか知っているの？ a. うん、知っているよ (YN)
b. 言語学だよ (WH)

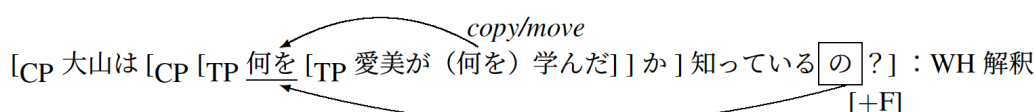
¹ tanaka-s@lit.kobe-u.ac.jp, ² michinao.matsui@ohsu.ac.jp

Ishihara (2005) および西垣内・日高(2010) によれば、素性付与メカニズム(2) に起因する統語構造の違いが(1)のような2通りの解釈をもたらす、その違いが音調に対応するという。

(2) a.



b.



- (3) a. YN解釈(Short EPD): 大山は愛美が なにを学んだか 知っているの↑
 b. WH解釈(Long EPD): 大山は愛美が なにを学んだか 知っているの↑

たとえば、(2a)のようにWH要素が埋め込み文内の元々の位置にある場合、WH要素は埋め込み文内の主要部である終助詞(以下、Cとする)「か」から焦点素性[+F]を受け取る。しかし主文主要部のC「の」は、phase不可侵条件(島の制約)によってWH要素に[+F]素性を付与できず、主文は埋め込み文内のWH要素との関係を持ってない。その結果(2a) YN解釈をもたらす。同時に、WH要素と埋め込みC「か」を領域とした中間句 (intermediate phrase; iP) が形成され、埋め込み文と主文とが別の音調となる(主文述語でfoの立て直しがある)

Short Emphatic Prosody (Short EPD) が実現される。一方、WH要素が(2b)のように高いTPに付加されると、主文Cから[+F]素性を受け取り、統語構造はWH解釈をもたらす。韻律構造においては、(3b)のようにWH要素から主文述部までがまとまり、主文のfoが抑制される Long EPDと解釈される。

さらに西垣内・日高(2013)は、佐賀方言が含意関係(2b) [+WH] → [+F] を持たないため、(1)に対しYN解釈のみを許すとしている。また、音調面においては、同方言は無アクセント方言でWH要素にアクセントを持たず、そこに音声的卓立が生じにくい。このように2つの方言の間にも統語解釈と音調に異なる特徴があり、検討すべき課題が確認される。

1.2. 本研究の着眼点

上記を踏まえ、本研究では、異なる音調体系を持つ複数の方言間の統語解釈と音調との異同関係に着目する。(1)の理解方略に関する知覚実験を行い、次の点を実験的に検証する。(a)YN解釈/WH解釈をもたらす音調上の手がかりと統語-音調間の対応との関係、(b)素性付与に関わる終助詞(C)の影響、(c)音調の自然性と疑問文解釈との関係、(d)方言間・世代間の異同関係である。(d)については、東京方言と同じアクセント体系に属するものの音調体系がさまざまな点で異なる名古屋方言、五十嵐(2010)で統語-音調間の対応関係が弱

いとされた関西方言、無アクセント方言である佐賀方言を取り上げる。3方言はアクセント体系の点でも対照的で、名古屋方言が東京式、佐賀方言が無アクセント、関西方言が京阪式に属する。関西方言がトーンと位置アクセントの性質をともに持つのに対し、名古屋方言は東京方言と同じく位置アクセントの性質のみを持つものの、WH要素にアクセントがなく(3b)の音調実現が困難とみられる。この点において、WH要素にアクセントを持たない関西方言・佐賀方言とも事情が共通する（加えて、表面的な音調を揃えやすい）。

また、西垣内・日高 (2010, 2013)では、(3a,b)の解釈がじっさいどの程度妥当なのかに関する知覚調査は行われていない。さらに、この点について名古屋・関西・佐賀方言を調査・分析した松井・田中(2025)、田中・松井(2025)では、文解釈の妥当性に関する知覚調査・分析は行っているものの、各音調の自然性自体については検討されていない。そこでこれらの観点も加え、条件を統制した刺激文を作成、各方言話者を対象とした知覚実験を行うことで、文音調と疑問文解釈との対応関係を方言間で対照する。

2. 実験手順

2.1. 刺激文・音声の設定

知覚実験に用いる刺激文は、先行研究に合わせ、[大山は [愛美が WH要素 埋め込みV 埋め込みC] 聞いている 主文C ?] という文型を用いた。(4)に名古屋方言の刺激文を示す。実験では、方言差を見る際に、語レベルのfo変化（語アクセント）の違いが影響することを可能な限り避けるため、3方言の表面的な音調がなるべく揃うよう試みた。関西方言で高起無核、名古屋方言で重音節で始まり（水谷 1960）、かつ無核の語を用いれば、いずれも高く平板な音調で発音され、無アクセント方言（佐賀方言）との音調の違いも少ない。また、関西方言の予備実験（松井 2024）で人名部分の音調が結果にほぼ影響しないことを確認できていたため、人名には重音節で始まる高起無核語で共通する「オオヤマ（大山）」「アイミ（愛美）」を選んだ。

WH要素に関しては、基本的に頭高型しか生起しない東京方言と異なり、名古屋・関西方言は豊富な音調パターンを持つ。WH要素として重音節で始まる高起有核((4a)どんなもんで) および高起平板((4b)どう)と、音調の卓立が難しい低起平板((4c)何を) の計3条件を設定した。また埋め込みCについては、[+F]素性(未定性・焦点情報) を持つ助詞「か」とともに、逆に既定性の高い助詞「って」を用いた検証を行う。その音調について「か」には高接と低接の2条件を設定するが、「って」については自然性を考慮し低接のみとした。続く主文述語については、埋め込み疑問文という性質上「理解」に関する動詞に限定されるため、高起かつ重音節で始まる無核語「聞いている」を選び、先行する埋め込みCが低接する場合に限り、主文述語の音調としてfo抑制の有無 (Long/Short EPD に相当) を制御した。最後に、主文末のCには名古屋方言では東京方言と同じ「の」を、関西方言ではそれに相当する「ん」を使い、文末音調として上昇音調と下降音調の2条件を設定した。これらの条件の掛け合わせにより、30種の刺激文を作成した。以下に名古屋方言の例を示すが、関西方言も概ね共通し、主文Cに「の」の代わりに「ん」が使われ、また、(4c)のWH

要素の音調が助詞まで低い「なにを」(何を)となる点のみ、名古屋方言と異なる。

(4) 刺激文 (30 例)

a. 10例 (WH高起有核) (文脈: 車のラッピングのことだけど)

大山は愛美がどんなもんで覆う {か/か/って} {聞いとる/聞いとる} {の↑/の↓}?

b. 10例 (WH高起無核) (文脈: クラブ活動の洗濯物のことだけど)

大山は愛美がどう洗う {か/か/って} {聞いとる/聞いとる} {の↑/の↓}?

c. 10例 (WH低起無核) (文脈: 授業選択の噂だけど)

大山は愛美がなにを学ぶ {か/か/って} {聞いとる/聞いとる} {の↑/の↓}?

佐賀方言については、(4)に相当する佐賀方言の刺激文(5)を用いる。なお、予備調査で埋め込みC「か」は東京風との指摘を受けたため「こっちゃい」も加え、すべての埋め込みCについて高接・低接の条件を設定するとともに、埋め込みCが低接する場合には主文述語のfo抑制有無も制御し条件を(4)と統一した。条件については、表1も参照されたい。

(5) 大山は 愛美が {どがんで覆う/どがんで洗う/なんば学ぶ} {か/か/て/て/こっちゃい/こっちゃい} {聞いとる/聞いとる} {と↑/と↓}?

2.2. 被験者

名古屋方言話者24名(19~55才)、関西方言話者66名(19~54才)、佐賀方言話者11名(62~78才)を被験者とした。世代差を分析するため、名古屋方言を中高年話者8名と若年話者16名に分けている箇所もある。中高年話者は54-55才で、全員が名古屋市中区大須または栄で生育し同地に居住している。若年話者は19-22才で、名古屋市およびその周辺地域に生育・居住している。

各被験者には、刺激音声に対し(名古屋方言では)YN解釈として「うん、聞いとるらしいわ」という回答を、WH解釈として「(4a)の答: ビニールでらしいわ/(4b)の答: 手洗いしてくれるらしいわ/(4c)の答: 言語学らしいわ」という回答をそれぞれ文章で提示し、YN解釈/WH解釈の自然性を各々「独立に」7段階で判断させた。他の2方言もこれに相当する回答文を用いた。回答に「らしい」というモダリティをつけることによって、YN解釈で起こり得る「聞いている内容(WH解釈の内容)」まで答えないと語用論上不適切になるといった判断傾向の可能性を防いでいる。被験者の反応は、一般化線形混合モデルとロジスティック回帰モデルおよびクラスター分析を用いて処理を行い、各方言における疑問文解釈の主要因を抽出した。統計上の数値が少し複雑なため、次節では主に散布図を用いた説明を行う。なお関西方言話者66名分のデータを1つにまとめた解析では、被験者をランダム切片に設定したモデルが収束しなかったため、被験者をYN解釈/WH解釈の関係が逆相関になるグループ(K1)と、弱い正相関になるグループ(K2)に分けた。

3. 結果

各方言の結果は、図1(a-d)の通りである。表1に図マーカーの説明を示す。

条件 (c)	(d)	(b)	助詞か		って／て	
			高接	低接	高接	低接
抑制なし	文末上昇		か↑	カ↑	て↑	テ↑
	文末下降		か↓	カ↓	て↓	テ↓
抑制あり	文末上昇			㊦↑		㊦↑
	文末下降			㊦↓		㊦↓

(名古屋・関西・佐賀共通)

こっちやい	
高接	低接
こ↑	こ↑
こ↓	こ↓
	㊦↑
	㊦↓

(佐賀のみ)

表1 散布図マーカー

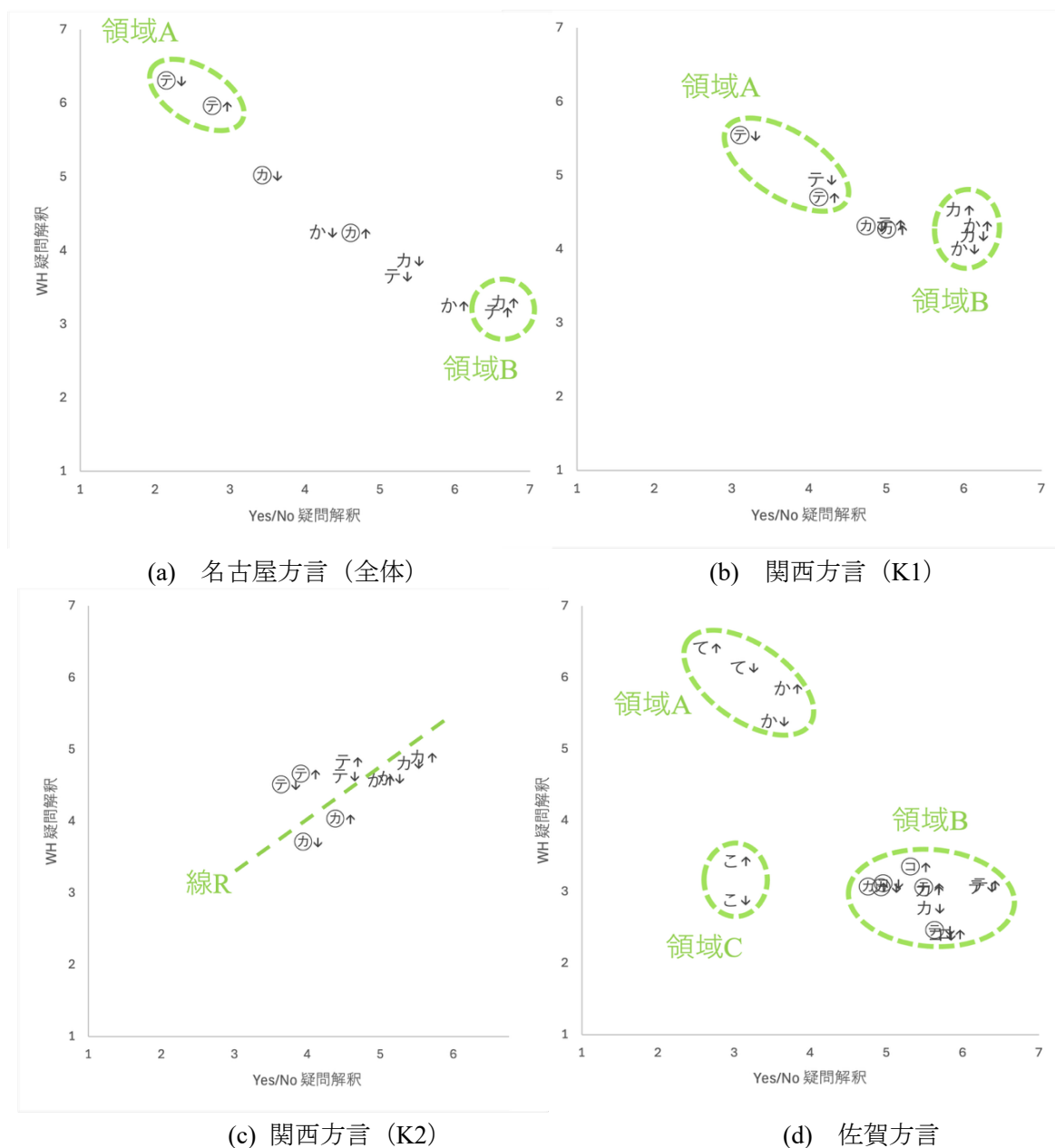


図1 各方言における埋め込み助詞・音調の組み合わせと疑問文解釈

3.1. 名古屋方言

図 1(a)の通り、名古屋方言話者においては YN 解釈と WH 解釈とが強い逆相関を成しており($r = -0.84$)、両解釈が相補的、弁別的であることが確認できる。WH 解釈の第一条件は「埋め込み C が「って」かつ主文述部 fo 抑制あり」(㊟↓、㊟↑)である($p < 0.01$)。それに続く条件として「埋め込み C が「か」かつ文末下降↓」(㊤↓)も作用する($p < 0.05$)。

YN 解釈の条件として「主文述部の fo 抑制なし」が主要因($p < 0.05$)で、この時「文末のピッチ上昇↑」も関与する(カ↑、テ↑)。このような文末音調の作用は関西・佐賀方言には見られない特徴であり、同方言における文末音調の非対称性が疑問文解釈に影響した結果と考えられる。この点については世代差も確認できる(4.1 節で分析する)。

また、興味深いことに、同方言において典型的な WH 解釈(㊟↓、㊟↑)および YN 解釈(カ↑、テ↑)は音調自体の自然性も高く、名古屋方言は最も音調に依拠した解釈の方略を持つことが確認できる。これらの点について 4.1 節で分析する。

なお、各方言を通して WH 要素の音調は疑問文解釈にほとんど関係しなかった。このため、各図では WH 要素 3 種(4a-c)を 1 つにまとめて表示する。

3.2. 関西方言

関西方言は、図 1 (b)の逆相関を示すグループ(K1: 66名中34名)と、図 1 (c)の正相関を示すグループ(K2: 66名中32名)の2つに分かれた。逆相関グループ(図 1 (b))は、名古屋方言ほどではないものの解釈間の弁別性が高い($r = -0.71$)。左上領域A (WH解釈)に「って」が、右下領域B (YN解釈)には「か」が集中する。つまり、疑問文解釈の主要因は埋め込みCの持つ「未定/既定」という意味機能である(オッズ比2.6, $p < 0.01$)。それに続き、音調面で主文述部fo抑制が条件となる(オッズ比1.65, $p < 0.05$)。なお、名古屋方言(図 1(a))の右下領域Bも同じく全要素が「主文述語fo抑制なし」という条件を満たす点で共通するが、そこに「って」(テ↑)が含まれている点で関西方言と異なる特徴を持つ。こうした条件間の交互作用を含めると、関西方言K1の疑問文解釈を決める最も強い要因は「埋め込みCの意味機能」かつ「主文述部fo抑制」であり、オッズ比は5.25 ($p < 0.01$)に及ぶ。

K2 (32名)は、図 1 (c)の通りYN解釈とWH解釈が弱い正相関を示す($r = 0.44$)。左側領域に主文述部fo抑制 (Long EPG: ㊤, ㊤)、右側領域にfo非抑制 (Short EPG: か、カ、テ)に相当する条件が集中する。主文述部fo抑制の有無が主要因で、オッズ比は9.4 ($p < 0.01$)を示す。K1とK2の違いは2要因「埋め込みCの機能」と「主文述部fo抑制」の強さ関係(制約の序列)に起因し、K1では前者が主要因で、それに後者が交互作用を持つのに対し、K2では後者が強い主要因で、それに前者が弱い相互作用として関わるということになる。

3.3. 佐賀方言

主文述部fo抑制が関与する名古屋・関西方言に対し、佐賀方言は「表面上」若干異なる傾向を示す。同方言は無アクセント方言のため、アクセントに由来するダウンステップすなわち主文述部fo抑制がほぼ影響しない。その代わりに、iP (中間句)の境界音高が重要な役割を果たす。たとえば(2a)では、埋め込み文の右統語境界にiP境界が設定されるため、その境界音高が埋め込みCを低接させる。一方、(2b)ではそこにiP境界が設定されず、境界音

高がないため埋め込み文Cは高接する。この埋め込みCにおける音調が佐賀方言の疑問文解釈を決める最大要因であり、これが図1(d)における左上領域A（WH解釈）に埋め込みCの高接条件が、右下領域B（YN解釈）に低接条件が集中する所以である。さらに左下領域Cに着目すると、すべてが「こっちゃい（高接）」である。同方言において埋め込みC「こっちゃい」は低接のみが許容され、文音調の自然性判断（4.2節）とも一致する。

4. 分析

4.1. 文末音調と世代差（名古屋方言）

図2は、図1をもとに文末音調（上昇／下降の関係）に着目したものである。矢印の起点は各要素の上昇音調を、着点是对应する下降音調を示している。名古屋方言の世代差の分析のため、中高年話者(a)と若年話者(b)とに分け、代わりに関西方言(K2)を除外した。

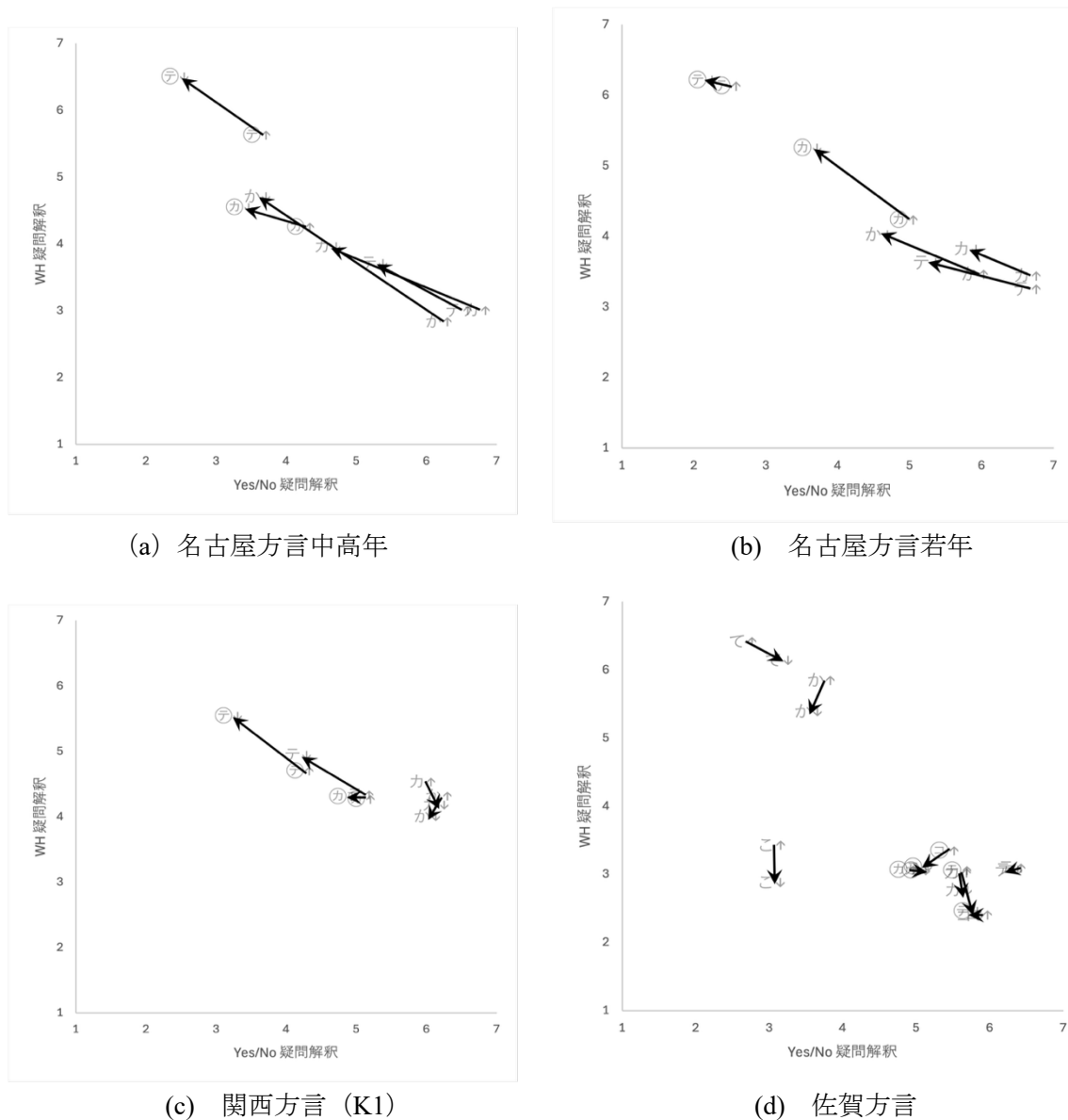


図 2 文末イントネーション（下降 ← 上昇）と疑問文解釈の変化

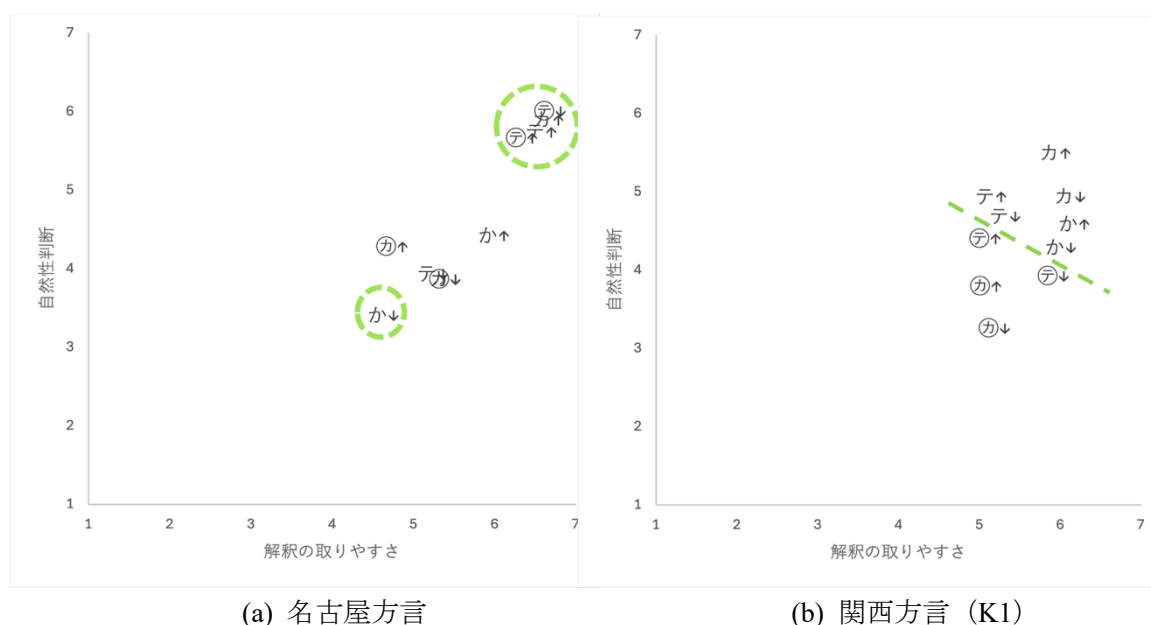
図 2(a-d)の比較から分かる通り、とくに名古屋方言において、文末下降が WH 解釈の相対的増加かつ YN 解釈の減少に大きく作用している。逆もまた然りである。各マーカーが上昇音調側に向かうと、例外なく YN 解釈の値が小さくなり（左に寄り）、かつ WH 解釈の値が大きくなる（上に寄る）。また、それらの変化幅が大きい（矢印が長い）。その方向および幅は中高年話者（図 2(a)）においてとくに顕著であり（ $r = -0.921$, $p < 0.01$ ）、若年話者（図 2(b)）がそれに続く（ $r = -0.973$, $p < 0.01$ ）。名古屋方言の特徴として、文末音調が疑問文解釈に強く影響すること、その程度は弱まる方向に変化していることを示している。

それに対し、同じ逆相関を示す関西方言 K1（図 2(c)）では、名古屋方言 2 グループよりも相対的に弱い相関を示す（ $r = -0.745$, $p < 0.05$ ）。また、名古屋方言において全ての要素に確認された方向性が、一部（埋め込み C「て」）においてしか確認できない。さらに佐賀方言においては、全体としては弱い相関は確認できるものの（ $r = -0.608$, $p < 0.05$ ）、名古屋方言に見られた方向性は全く確認できない。

名古屋方言の文末音調の特徴（YNQ では上昇、WHQ では下降）が埋め込み疑問文解釈にも関与し、世代間変化も反映する結果となった。このような文末音調と疑問文解釈との関係および変化は興味深い点であり、生成面を含め、他方言（WHQ に対し下降音調を伴う、松本方言、広島方言など）も視野に入れながら検証する予定である。

4.2. 音調の自然性と疑問文解釈

最後に、図 1 で確認した疑問文解釈と、文音調の自然性との関係を検討する。被験者は、各文音調自体の自然性についても、独立して 7 段階（自然 7 – 不自然 1）で評価している。その結果が表 3(a-d)であり、各記号はそれぞれ表 1(a-d)と対応する。X 軸に前節で得られた YN/WH 解釈の数値のうち「高い方」の値を疑問文の「解釈の取りやすさ」として、Y 軸に当該刺激文の音調としての自然性判断の値をそれぞれ示す。



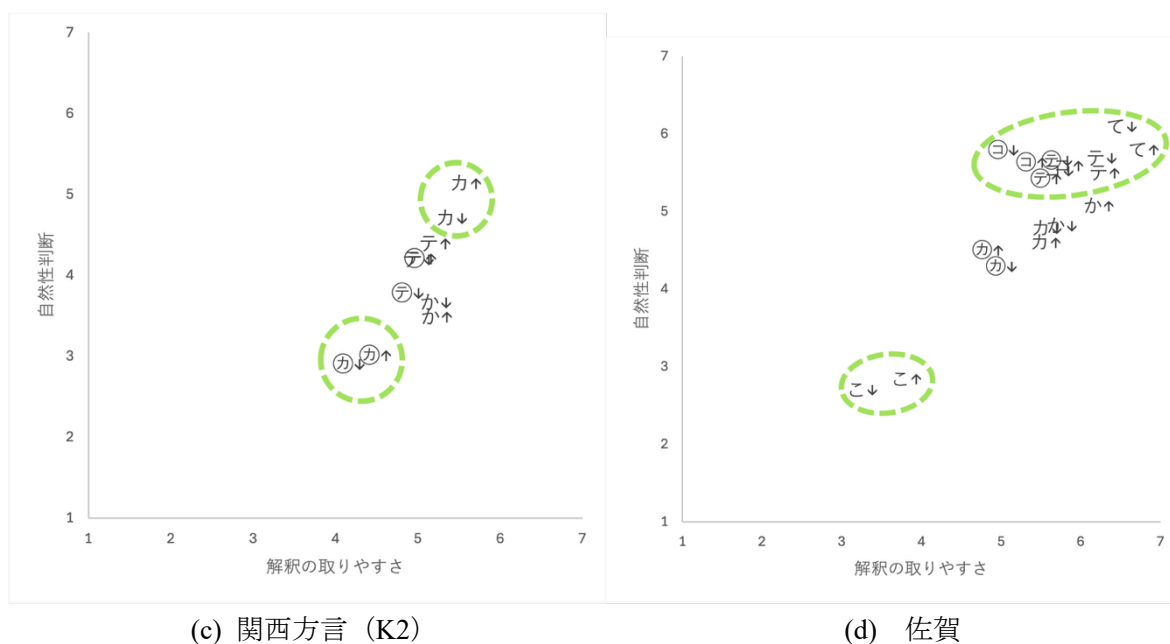


図 3 文音調の自然性と疑問文解釈

まず、名古屋方言において、YN/WH 解釈の取りやすさと音調の自然性との間に明確な正相関が確認できる ($r=0.799261269$)。重要な点として、図 3(a)右上（疑問文解釈の取りやすさ、文音調の自然性がいずれも高）の領域に、図 1(a)の典型的な WH 解釈（ $\bar{a}\downarrow$, $\bar{a}\uparrow$ ）および YN 解釈（ $カ\uparrow$, $テ\uparrow$ ）の 4 例全てが集中している。このことは、名古屋方言において、音調と疑問文解釈と間に典型的な組み合わせがあり、同方言話者がそれに基づき疑問文解釈を行っていること、また、それ以外の組み合わせにおいては、解釈は可能であるが、音調の不自然さのため、それが安定しないということを示している。名古屋方言における疑問解釈の音調への依存度の高さを示した結果と言える。

関西方言(K1)においても、疑問文解釈と音調の自然性との間に正の相関が確認できた ($r=0.799163332$)。しかしながら、その関わり方が大きく異なり、fo 抑制あり（○印）の自然性が低いのに対し、fo 抑制なし（印なし）の自然性が高く、二分されている。

関西方言(K2)は、他とは異なり、疑問文解釈と音調の自然性との間に明確な関係が確認されない ($r=0.340323775$)。このことは、3.2 節でも確認したように、同グループの話者が疑問文解釈に関して、もっぱら統語構造に依拠した方略を取ることと合致する。しかしながら興味深い点として、K1 と共通して fo 抑制がある刺激文（○印）に対する自然性が低く、fo 抑制のないものへの自然性が高い。このことは、fo の明確な高低を保持する関西方言の特徴と一致し、また、東京方言と比べダウンステップによる fo 抑制の程度が低いとの報告（郡 2004）とも符合する。

佐賀方言において、3.3 節で確認した高接「こっちゃい」（ $こ\uparrow$, $こ\downarrow$ ）の音調としての不自然さが読み取れ、これが疑問文解釈の困難さに影響することが分かる。また、それ以外の組み合わせは疑問文解釈も自然性の値も比較的高く、同方言において埋め込み C が高接すれば WH 解釈が、低接すれば YN 解釈として処理される方略と概ね一致する。

5. 考察・課題

結果を総合すると、名古屋・関西・佐賀方言において、疑問文解釈に対する方略に方言を超えた共通性ととともに、方言音調体系にもとづく差異も確認できる。疑問文解釈において共通の役割を果たすのは、(2)がもたらす統語構造と言える。たとえば、埋め込みCが既定性の高い([+F] 素性との関連性が低い)「って」の場合、WH 要素は主文Cから[+F]素性を受け取り(2b)のような移動を起こし、どの方言においてもWH 解釈が優位となる(それが各方言において音調と対応するが、その具体的実現は方言によって異なる)。

また、とくに名古屋方言と佐賀方言では、共通して統語-音調間の対応制約も強く働く。たとえば統語部門で素性付与(2a)が起こった場合、狭い iP が設定されるため、名古屋方言ではその狭い iP がShort EPDを、佐賀方言では狭い iP の境界音高が埋め込みCの低接をもたらす。これに対し(2b)では、埋め込み文の右統語境界に iP 境界が設定されないため、名古屋方言ではLong EPDが、佐賀方言では埋め込みCの高接が実現し、ともにWH解釈を導く。

関西方言においても統語-音調間制約が機能すれば、名古屋方言と同様の音調が実現される。ただしその制約順位が低い傾向にあり、五十嵐(2010) が指摘した方言差を本研究の統語情報でも確認できた。

文末音調に関して方言差があり、名古屋方言は関西・佐賀方言と比べその影響が大きく、同方言における文末音調の非対称性が、埋め込み疑問文において関与することが確認された。そこに世代差があり、若年話者において文末音調の効果が相対的に低下することにも明らかとなった。この点については、とくに若年話者においてWHQの上昇調も許容する方向に(YNQとWHQが文末音調によって区別されにくく)変化しているとの報告(田中2024)とも並行的である。単純疑問文を含めた生成面の調査分析を遂行する予定である。

さらに、音調の自然性判断と疑問文解釈との間の方言差についても、興味深い異同が確認された。名古屋方言においては音調の自然性が疑問文解釈に比較的強く影響し、佐賀方言でも特定の組み合わせ(こっちゃい・高接)が自然性と疑問文解釈をともに低下させる、つまり、両者が関係する結果となった。それに対し、関西方言においては両者がさほど強く対応せず、疑問文解釈のしやすさとは独立して、とくにfo抑制が許容されにくいという結果が得られた。関西方言におけるfo抑制の非選好は、ダウンステップによるfo抑制程度の低さ(郡 2004)とも符合し、同方言の特徴と考えられる。この点について、今回の刺激文に対して主文述部のfo抑制の程度を段階的に変動させた合成音声による知覚実験を準備中である。また、単純WHQおよび生成面での分析も今後の課題とする。

今後、統語-音調間対応の効力に影響を与える要因や、文末音調の機能、 iP とMPの関係といった検討事項を含め、方言間の類似点・相違点を明らかにするため、東京方言や、埋め込みCに固有の音調を持つ福岡方言、n型アクセント方言、上り核を持つ方言などの知覚・生成実験を行う予定である。疑問文解釈に関与する文法・意味・音声的制約の種類および優先順位の関係を、方言の音調体系をもとに整理すること、さらに、それらをもとに最適性理論の枠組みから分析することも今後の課題とする。

謝 辞

本研究は、NINJAL 基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」および JSPS 科研費基盤研究(B)「疑問詞文のプロソディーに関する音声学・言語学の融合的・実証的研究」(課題番号: 23K20460, 21H00523, 研究代表: 田中真一)、同基盤研究(C)「日本語音素の異音における喉頭制御と口腔内制御に関する総合的研究」(課題番号: 22K00544, 研究代表: 松井理直)の助成を受けている。調査にご協力下さった方々にお礼申し上げる。

文 献

- 五十嵐陽介 (2010) 「統語論における枝分かれ構造は韻律にどのように反映されるのか? — 近畿方言と東京方言の場合 —」 『音声研究』 14(3), 73–78.
- Igarashi, Y. (2019) “Dialect-specific prosodic phrasing in Japanese: With a focus on dialects without lexical tone contrasts.” A paper presented at ICPP 2019. NINJAL.
- 犬飼隆 (2006) 「尾張方言疑問詞疑問文の音調」 音声文法研究会(編) 『文法と音声』 5, 77–92. 東京: くろしお出版.
- Ishihara, S. (2005) “Prosody-scope match and mismatch in Tokyo Japanese Wh-Questions.” *English Linguistics* 22(2), 347–379.
- 郡史郎 (2004) 「東京っぽい発音と大阪っぽい発音の音声的特徴: 東京・大阪方言とも頭高アクセントの語だけから成る文を素材として」 『音声研究』 8(3), 41–56.
- 松井理直 (2011) 「音韻部門における統語的焦点素性の韻律解釈」 *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 14, 45–80.
- 松井理直 (2024) 「統語的焦点素性の解釈と関西方言の音調」 JSPS 科研費基盤研究(B) (田中真一) 研究会. 2024年3月9日, 神戸大学.
- 松井理直・田中真一 (2025) 「埋め込み疑問文解釈の統語・意味情報と方言音調体系との対応関係—関西方言・佐賀市方言を中心に—」 『第39回日本音声学全国大会予稿集』 掲載頁未定. 日本音声学.
- 水谷修 (1960) 「名古屋アクセントの一特質 (前半)」 『音声学会会報』 102, 8–10.
- 西垣内泰介・日高俊夫 (2010) 「Wh構文の解釈と韻律構造」 『日本言語学会第141回大会予稿集』 272–277.
- 西垣内泰介・日高俊夫 (2013) 「Wh構文の解釈と韻律構造—佐賀方言と東京方言の対照—」 *TALKS* 16, 99–115.
- Pierrehumbert, J. and M. Beckman. (1988). *Japanese Tone Structure*. MIT Press.
- Poser, W. (1984) “The Phonetics and Phonology of Tone and Intonation in Japanese.” Ph.D. dissertation, MIT.
- 田中真一 (2021) 「名古屋方言疑問詞疑問文におけるピッチ変更」 岸本秀樹 (編) 『レキシコン研究の現代的課題』 185–204. 東京: くろしお出版.
- 田中真一 (2024) 「名古屋方言疑問詞文における下降音調の生起について」 JSPS 科研費基盤研究(B) (田中真一) 研究会. 2024年3月9日, 神戸大学.
- 田中真一・松井理直 (2025) 「名古屋方言の埋め込み疑問文解釈における統語・意味情報と音調—世代差と方言音調体系に着目して—」 『第39回日本音声学全国大会予稿集』 掲載頁未定. 日本音声学.

編集後記

『Evidence-based Linguistics Workshop』も今回で第4回を迎えました。本ワークショップは、理論言語学や対照言語学の分野において、言語学のオープンサイエンス化を推進することを目的とし、査読にとらわれない自由な発表の場として運営しています。既存の学会で採択に至らなかった研究や、着想段階のアイデアも歓迎しておりますので、ぜひ積極的にご応募ください。地方からの発表者には旅費支援も行っておりますので、この機会をご活用いただければと思います。

今回のプログラムは、招待講演1件、口頭発表4件、ポスター発表13件で構成されており、9月15日・16日に国立国語研究所にて開催いたします。また、研究所からは2件のプロジェクト紹介を行います。さらに今回は、併催企画として関連テーマのワークショップも実施いたします。研究交流の幅を広げる機会として、ぜひあわせてご参加ください。

浅原正幸（国立国語研究所）